始

特233
489

文庫アモーユ

年の義根屋

作記

日志早苗著

東成社版

納本 昭和十五 十二 本 四

目次

屋根裏の年代記……一
戀人の內職……五七
驢馬と特急……六一
明眸交叉點……九二
まごつき街道……一三二
びつくり交響樂……一五一
御婦人に限る……一七九
ドンナ・コンナ物語……二〇五
第二の鬼……二一九
馬鹿だるま……二二五
將棋大佐とピアノ夫人……二七一
反故詩人……二八九

屋根裏の年代記

裝幀

吉田貫三郎

石光さんは非常識なお方

『いゝ風が入りますな』

石光三郎は窓に凭れて、暗い海を見下してゐた。

『いゝ風でせう。何しろ、江ノ島随一の高臺ですからなア』

おつさんは得意さうにグイと泡盛を飲み干した。

江ノ島東海岸の頂上にある家の屋根裏である。おつさんは貝細工製造業者で、石光は夏場だけこの部屋を借りてゐる青年畫家だ。まだ獨身で、年は若いけど春陽會の會友で、今日は銀座の畫商に委託してあつた繪が賣れたので、その代金を受取りに東京へ出て先刻歸つて來たところである。東京で本場の泡盛を手に入れて來たので、この部屋でおつさんに御馳走してゐるのだ。

『あら、一番の高臺は朝日屋さんよ。あすこは七階建で、階段が百三十三段あるんですつて』

おつさんの一人娘、明子が傍から訂正した。

『へん、朝日屋が何だい。高が旅籠屋ぢやないか』

おつさんは機嫌が悪い。元來このおつさんは、表通りの旅館や賣店が嫌ひである。同じ江ノ島

でも表通りとこの東海岸とでは、まるで世界が違ふ。表通りは商人の街、東海岸は漁師と職人の部落だ。

『まア少くとも、東海岸ではこの部屋が一番見晴らしがいゝでせうね』

石光は仕方なく仲裁役を引き受けた。

『石光さん。この本、何だか難かしさうな本ねえ』

明子は、大型の部厚な本をパラ〳〵めくり出した。これは明子への、石光の東京土産である。

どの頁にも、片假名の固有名詞が澤山出てゐる。

『難しい筈はないですがね。小説ですから——』

石光は、かういふ物の云ひ方をする男である。これでは、到底女に好かれさうもない。果して明子はそのまゝ默り込んでしまつた。明子は東京の女學校を卒業した、それこそ東海岸随一のインテリ女性で、芳紀二十二歳——、月々の雜誌も滿足に讀めない島の生活は、映畫を觀られないよりも寂しいと何時も石光に零してゐるのだ。だから態々大森のアパートまで廻つて、自分の本棚からロマン・ローランの長編小説を持つて來てやつたのだ。それは、誠實で謙遜な音樂家の一生を描いた物語で、石光の愛讀の書だつた。自分の愛讀の書なら、他の人も愛讀してくれるだらうと思つたのが、そも〳〵の不覺で、明子は、あんまり嬉しさうな顏をしないのである。

『石光さん、こんな所に繪葉書が――』

頁の間から明子が一枚の繪葉書を取り出した。

『あ、その本に挿んであつたですか。それは僕の春陽會第一回入選作の繪葉書です』

石光は眼を輝かせた。その繪葉書の畫題は「Y氏の肖像」としてあつた。當時Y氏は、S製藥の廣告部主任で、その頃石光は內職に飾窓意匠業――通稱ウインドウ屋をやつてゐたが、Y氏は何かと親切に仕事の世話をしてくれた。石光にとつて、苦難時代の恩人である。そのY氏をモデルにした繪が、最初に春陽會に入選したのであつた。Y氏は事變勃發早々出征した筈である。

『似てますわね』

繪葉書の肖像を眺めながら、明子は獨り言みたいに云つた。

『誰に？』

『誰につてことはないけど、何だか、こんな方が實際にゐる樣な氣がしますわ』

『本當ですか。いや、有難い。貴女は繪が判る』

石光は膝を叩いて喜んだ。

由來、肖像畫は誰かに似てゐるべき筈である。必ずしもモデルに似てゐなくともいゝ。要するに、何となく實在の人間らしく描かれて居れば、それはいゝ繪なのだ。だから肖像畫を見て、

『似てゐる』と云はれると、繪描きは喜ぶのである。

生憎明子は、そんな畫家の習慣は知らないから、石光の驚喜ぶりを見て、少々面喰つた。

『ほんとに見事な繪ですこと。こゝの壁に貼つてようございます？』

照れ隱しのお世辭だつた。

『あゝ、どうぞ。こゝに鋲がありますよ』

石光は欣々と、机の引出から鋲を出したが、

『だけど、色んなものが並んでますなア』

と改めて部屋を見廻した。

なるほど、並んでゐる。壁には、大きな黑鯛の魚拓が貼つてあり、その隣に押し花みたいな植物の標本が貼つてある。天井からは模型飛行機がぶら下つてゐるし、形ばかりの床の間には、片羽しかない鷲の貝細工が置いてある。

『これらは貴方、この部屋の、謂はゞ年代記でさア』

おつさんは泡盛の盃を下に置いて、若い者の話に仲間入りをした。

『皆それ〳〵、由來があるんでしてね』

おつさんの解說は、さつと次の如くであつた。

黑鯛の魚拓は、やはり夏この部屋を借りてゐた人の記念品である。その人は東京の中學の先生で、事變が始まつた年までは、毎年夏になるとこの部屋を借りて釣をしてゐた。それが、次の夏から來なくなつた。出征したのださうである。

お次の植物の標本は、箱根蘆ノ湖の硅藻である。これは、次の年の夏に來た株屋の番頭さんの採集したもので、學問的に見て、仲々値打のあるものださうだ。

次の夏、卽ち去年の夏この部屋の住人になつた銀行家は、模型飛行機を殘して行つた。去年片瀨の海岸で模型飛行機の競技會があつたが、こゝにぶら下つてゐる飛行機は、滯空記錄八分三十秒を出して、競技會で一等賞を貰つたといふ。

『なるほど、夏每の記念品だから、それで年代記なんですね』石光は笑つて、『あの鷲の置物は——？』

と床の間へ眼をやつた。

『これは大した物です。年代記の親玉ですよ。死んだ親爺の自慢の細工でしてね、こんな逸物は、江ノ島に二つとありませんや』

おつさんは目玉をグルリと廻した。

『でも、お父さん。朝日屋さんには、家康公の硯があるつてよ』

『何でえ。又、詰んねえことを——。朝日屋々々々つて、お前は朝日屋の廻し者か』

『だつてお父さんが、あんまり自慢するんですもの。羽が一つしかない不具の置物を、ホヽヽヽ江の島第一だなんて——』

『その片つ方の羽は、多分、まだ生え揃はんのでせう』

例によつて石光がお節介役を引き受けた。父一人娘一人の二人を喧嘩させたくないからで——

『生え揃はない？　そ、その通りだ。いゝことを云つて下すつた。羽がまだ生え揃はねえんだ』

おつさんは、まるで泣いてるかと思はれる程の喜び振りだつた。これには何か譯があるのだなと、石光は察した。

だがその時明子は繪葉書を鋏で壁に止めてゐたが、壁に向つてクスリと笑つた。「何十年も經つた古い置物が、まだ羽が生え揃はないなんて——。石光さんは非常識なお方だわ」彼女はさう思つて可笑しくなつたのだ。

可哀想に石光三郎、彼女に笑はれたのも知らないで、賞められたので氣をよくしたのか、おつさんにお酌のサービスなどをしてゐる。

青空も曇る

『朝から御精が出ますね』

おつさんの仕事場へ石光がブラリとやつて來た。

『いや、なアに――』

おつさんは振り向きもしないで、『石光さん、今日は雨らしいですぜ。スケツチは駄目でせう』

『え、雨？』

石光は仕事場の天窓を見上げた。硝子を透して青空が見える。石光は、このおつさん何を云つてるのかと思つた。

『ほら、貝の粉が濕つてるでせう。かういふ日は、午後から屹度雨でさア』

濠洲産の蝶貝に、齒科醫が使ふみたいなハンド・ビースをガリ〳〵當てながら、おつさんは自信あり氣に云ひ足した。

二間に一間半の狹い仕事場は、床一面、貝の粉だつた。蝶貝、青貝、寶貝の粉である。仕事場の一方は母屋の臺所口に續き、一方はそゝり立つ岩壁だ。この、謂はゞ岩窟みたいな場所で、おつさんは日がな一日、貝殼を削り貝殼を磨さ貝殼を彫つてゐるのだ。出來上つた製品は表通りの寶店へ出すけど、おつさんは殆んど表通りの虛榮市場へ出たことがない。棧橋を渡つて片瀨の街へ行くことすら、恐らく、年に幾回もないだらう。仕事だけが樂みで、明子みたいに本を讀みたいの映畫を觀たいのといふ慾望はないのだ。

『どうせ今日はスケツチは休みです。片瀨の臨海療へ行く豫定なんです。彼處なら、たとひ雨が降つても構はないから――』

『臨海療？』

『昨日、スケツチに行く途中で發見しました。「靖國の遺兒」の臨海療ですよ』

『あゝ、新聞に出てゐた――』

おつさんは仕事をやめて立ち上つた。

それは、軍人援護會東京支部でこの夏から始めた企畫で、戰死者の遺兒達にとつての夏の樂園である。一回の定員は四十名で、十日間づつ四回交代するのだ。每日のプログラムや行事等、詳しく地方版に出てゐた。

『僕、昨日紹介もなしに飛び込んで見ましたらね、係りの先生が喜んでくれて――』

『それよりも子供達が喜んだでせう。繪の先生が舞ひ込んだのだから——。いゝことをなすつた』

さう云ふおつさんまでが嬉しさうだつた。

『おつさん、臨海療の部屋の名前は、皆魚づくしなんですよ。鯛の間、平目の間、さゝえの間なんて——。それで僕、早速魚の繪を描いてね、部屋々々へ貼つて來ました』

『はつはつは。お手のものですからなア。それで、今日もお出かけなんですね』

『えゝ。時々來て圖畫指導をしてくれと賴まれたもんでね。おつさん、子供達は可愛いですよ』

『さうでせう、さうでせう』

おつさんは幾度も頷きながら仕事場を見廻してゐたが『儂も、何かお土産を上げたいんだが、生憎、子供さん向きのものはなくてねえ』

全く、この仕事場の製作品は、手の混んだ置物とか、食器とか、パイプ等で、女學生向きのブロウチとか小學生向きの文鎭、柱かけ等はない。このおつさんに云はせると、ブロウチとか柱かけの類は賣れることは賣れるけど下級品で、生え拔きの職人の作るべきものぢやないんださうだ。そこへ行くと、パイプなんか、あれで案外高級品で、あの穴を滿足に開けるには、相當の年期が要るといふ。

『それに、子供達が四十人もゐるんですから、一々お土産なんて迚も無理ですよ』

石光は、賣れない「高級品」ばかり作つてゐるこの老職人を、さう云つて慰めながら、仕事場を出ようとした。

『石光さん。ちよつと待つて下さい。お賴みがある』

何を思ひ出したか、おつさんは母屋へ驅けて行つて、間もなく一枚の紙切を持つて戻つて來た。

『これなんですがね。あの黑鯛の先生です。臨海療にひよつとしたらこの先生の子供さんがゐませんか』

『おつさん。では、この先生は戰死したんですか』

部隊名と姓名を書いたその紙切を受け取りながら石光は訊ねた。

『そ、それが判らないんですがね。出征當座は屢々手紙が來たのに、一年半ほど、ちつとも便りがないです。それで、若しやと思つてね』

おつさんは心配さうに口籠つた。

砲兵少尉淺見重次——屋根裏年代記中の一員、黑鯛魚拓の敎諭である。あの屋根裏を借りてゐた年數も一番多く、自然、おつさんとも一番親しかつたから、おつさんがその消息を心配するの

も無理はない。原隊が東京だつたから、もしかしたら子供さんがあの臨海療に――と思つたのである。

『承知しました。僕は、この先生の子供さん達が遺児の中に居ないことを望みますがもし居ましたら、早速――』

紙片をポケツトに收つて、石光は出て行つた。

『儂が自分で臨海療へ行つて訊ねたいんだけど、靖國の遺児達に、合はせる顏がないからなア』

獨り言を呟いて、おつさんはグツタリと仕事臺の前に坐つた。自分の家からは、戰死者どころか出征兵士も出してゐない――これが、生一本で名人肌のこの老人を何時も苦めてゐるのだ。肩身が狹いといふよりは、おめ〳〵と人前に出られないといふ氣持――殊に靖國の遺児達には、全く、合はせる顏がないと思ひ込んでゐるのだ。

『儂に倅がないから、せめて茂が居てくれたら――』これが何時も、おつさんの嘆きだつた。

茂といふのは、おつさんの弟である。

弟は四つの時に行方不明になつた。三十年前の夏である。迷子になつたのか攫はれたのか、判らない。ヨチ〳〵と、當もなく何處までも一人歩きをする兒だつた、一寸目を離してゐる間に南北八丁の棧橋の、彼方岸まで行つてゐたこともあつた。到頭、或る夏の眞晝の雜踏時に、弟

は居なくなつてしまつた。

『サナギは蝶々に、フツコは鱸になる世の中だ。あのヨチ〳〵歩きの茂も、今居てくれたら、立派な出征兵士になつてゐたらうになア。そしたら儂も、大威張りで臨海療へ行けたものを』

おつさんは溜息をついて天井を仰いだ。さつきまで天窓から見えてゐた青空は、おつさんの豫言通り、何時の間にか曇つてゐた。

あら、義夫さんでしたわねぇ

『貴女がこんな店の賣子になつてるなんて、どうも僕には分らんですな』

表通りの賣店へ入つて來て、石光はソツと明子に囁いた。

彼女程の美貌と學歷があれば、何も、島の中で燻つてゐる必要はないと思つた。東京へ出ればいくらでも勤め口はあると思つた。ましてや彼女は、映畫と書箱に飢ゑてゐるではないか――さういふ石光の口吻だつた。

『お父さんのためなんですのよ。それで私――』

店頭に流れる絡繹たる人通りを眺めながら、明子はやはり小聲で答へた。

『さうか。お父さんが貴女を島から離さないんですね』

『いゝえ。お父さんの貝細工のためなの』

明子は、そこに並べてあるおつさん苦心の作品に目を落して『お父さんの細工物は、私がゐないと賣れないんですよ』

『えゝ？』

『ほら、この間、細合長の鈴木さんが家へいらした時も、そんな話が出たでせう。「土産物の賣行きは、賣子次第だ」って――』

『あゝ成程、さうですか』

石光はやつと合點が行つた。

かういふ遊覽地の土産物といふのは、一種獨特の商品學を構成する。つまり、まともな物は賣れないのである。貝殻を磨いて見て、さて細工をしようといふ時になつて初めて疵を發見することがある。さういふ時は仕方なく、歪んだ恰好の鮎などが出來上る。だが、その歪んだ出來損ひの鮎を、遊覽客は『これは變つてる。乙だ』などと買つて行くのだ。遊覽客心理と云ふのだらうか。

『お父さんたら「儂は土産物職人ぢやない。細工物職人だ」なんて威張つてるんですもの』

明子は苦笑した。

『だから、その賣れないお父さんの細工物を、貴女の腕で賣らうとするんですね』

石光も釣られて笑つたが、彼も繪描きだけあつて、さういふ頑固一徹なおつさんの氣持はよく分つた。そこへ、サラリーマンらしい若い男が入つて來た。

『パイプは如何でございます？　これならお上品で、七・七禁令にも觸れません』

明子は早速、おつさん製作のパイプをその男にすゝめた。その男は三つ買つて行つた。

次に現れた中年の紳士には、明子は大きな蝦貝で作つた西洋皿を半ダース賣りつけた。

『伊太利大使のアウリツヂさんが、これと同じのを一ダースお求めになりました』この明子の宣傳が效いたのだ。

『うまいもんだ。これなら、おつさんの貝細工がドン〳〵賣れるだらう。凄い腕前ですね』

石光は感心した。彼女が『見るは法樂、目のくすりですか』とか、『何か如何ですか。お土産は如何』とかいふ千遍一律の下品な賣聲を眞似ないで、父親の誇りを傷けない獨自の宣傳法をやつてるのが、石光には嬉しかつた。

『私の腕前の所爲ぢやありませんわ。お客さんが多いから賣れるんですのよ』

賞められた明子は、さすがに顏を赧らめて『何しろ、一日に何萬といふ人の顏を見るんですも

の。ですから私、見たことがあると思つても、どうしても思ひ出せない顔があるんですわね』

さう云つて彼女は石光を見上げた。例の「Y氏の肖像」のことを云つてるといふことは、石光には直ぐ分つた。彼は默つて頷いて見せた。

だがその時、明子の眼は既に店先の方へ向けられてゐた。

『あら、義夫さんでしたわねえ。今、お歸りになりましたの？』

石光が明子の視線を追つて振り返つて見たら、其處には帝大の制服を着て旅行鞄をさげた青年が、明子と顏見合せて微笑んでゐた。

『誰？』

その青年が立ち去つてから、石光は尋ねた。

『朝日屋の二番目の息子さん。田舍の高等學校から東京の大學へ行つたせゐですか、すつかりスマートになつて、私、ちよつと思ひ出せなかつた』

明子は娘々らしく目を輝かせた。

『朝日屋の——？　ふウむ』

石光は急に考へ込んでしまつた。

かうなつたら離さねえ

二十五對二十六といふ、七回ゲームにある大接戰で、紅組が勝つた。

片瀨海岸の裡野球である。選手は紅白兩軍とも、靖國の遺兒臨海寮の少年達だ。第三班が十日の鍛鍊期間が終つて、明日第四班と交替するので、今日がお別れの運動會である。

『すごいぞ亮ちやん！　すごいぞ！』

テントの中にゐた石光は雀躍して叫んだ。だが次の瞬間、急に寂しくなつた。

亮ちやんは紅細の投手である。しかも、あのY氏——石光の恩人、出世作肖像畫のモデルの、Y氏の遺兒なのだ。

全く、思ひがけない所で思ひがけない人に逢ふものである。おつさんに賴まれた淺見黑鯛敎諭は、戰死しないことが判明した。一度戰傷したが、回復して再び前線へ出てゐるさうだ。ところが、別に訊ねるつもりもなかつたY氏の戰死を、第三班が到着した日、亮ちやん達の名簿を見た時に、石光は發見した。Y氏は、南昌の戰鬪に、花と散つたのださうである。

その翌日から、石光はスケツチにも行かず寶店の明子嬢も訪ねず、毎日臨海寮へ來て亮ちやん

を慰め、元氣づけた。

その亮ちやん達が明日東京へ歸るといふので、また當分滯在する豫定だつた石光が、急に亮ちやん達と一緒に歸ることに變更した。

江ノ島の生活が味氣なくなつたのである。それは、亮ちやん達が來る以前からだつた。そもそも明子の寶店で、朝日屋の次男に會つた時以來である。

あの時石光は、朝日屋の次男を一目見て、これは明子の戀人なりと鑑定した。同時に、自分が彼女を戀してゐることを、その時初めてハツキリ自覺した。彼女が何時かの晩、朝日屋は七階だとか百何十何段あるとか、家康公の碗が何うしたとか、頻りに朝日屋の肩を持つてゐることを思ひ出すと、今更の樣に憎らしくなつた。

いや、そればかりではない——。

『小父さん。何をボンヤリしてるの。早く賞品を頂戴！』

亮ちやんに催促されて、石光はハツと我に歸つた。さうだ、僕は賞品係だつけ！

テントの中からも、砂原の觀客席からも、ドツと笑聲があがつた。石光はすつかり狼狽した。

『よし來た。すごい賞品だぞ。鶴のトロフィーだ』

石光は、貝細工の鶴の置物を亮ちやんへ授與しようとしたが、愕てたので手許が狂つた。ガク

リと、一つの羽が外れた。

『やゝ、毀れた。これは、大變——』

石光はヘドモドした。おつさんから預つて來た大切なトロフィーである。こゝで毀しちや相濟まない。おつさんは、淺見黑鯛敎諭の健在が判明したので、そのお祝ひの氣持から、今日の試合にトロフィーを寄贈したのだ。

『小父さん。毀れたんぢやないよ。繼げるんだよ。かうやつて——』

この時亮ちやんは少しも騷がず、落ちた羽を取り上げて修繕工作にとりかゝつた。

『だ、駄目だよ。亮ちやんなんか！——』

石光はハラ〳〵した。下手をやられて、これ以上毀されたら敵はんと思つたのだ。

『大丈夫だよ。僕、知つてる。だつて僕、鷲の羽を持つてるんだもの』

亮ちやんがさう云つたのと同時だつた。觀客席から、それこそ鷲の樣に飛び出して來た親爺さんがあつた。

『あツ、おつさん！』

石光は目を丸くした。現れたのは、おつさんだつたのだ。試合には來ないと云つてゐたが、何時の間にか、觀に來てゐたと見える。

『つかまへた。かうなつたら離さねえ』

氣でも狂つたのか、おつさんは、亮ちやんの小さな體を羽交締めに抱きしめた。

燈臺許暗からず

『さア皆、見てくれ。鷲の羽が生え揃つたぞ！』

酒も飲まないのに、おつさんの顏は眞赤だつた。東海岸の屋根裏である。

皆の視線は鷲の置物に注がれた。誰も、一語も發しなかつた。石光、明子、それから亮ちやん

——。

鷲の置物の双翼が揃つたのである。片つ方の羽を亮ちやんが持つてゐたのだ。南昌の戰鬪で戰死した父の形見として、また護符として、何處へ行く時でも母親は、亮ちやんの鞄の裡に入れてやつた。だから、臨海寮へも持つて來てゐたのである。野球場でそれを確めたおつさん早速臨海寮へ行つた、係りの先生の許可を得た上で、その羽を檢分した。紛ふ方なく、それは屋根裏の鷲の片割れ羽だつた。

『さうすると、亮ちやんは私の從弟なのね』

明子は、石光の膝に手を置いて恥しさうにしてゐる亮ちやんへ、潤んだ眸を向けた。

「Y氏の肖像」のモデル、石光の恩人のY氏は、實に、おつさんの弟だつたのだ。四つの時行方不明になつた弟は、居なくなる直前まで父の仕事場で鷲の置物を玩具にして遊んでゐた。その時は氣が附かなかつたが、居なくなつてから、弟が羽の一つを持つて行つたことが判明した。だが、愛兒の失踪に落膽した父は再びかけ換への羽を作らうとはしなかつた。さういふ因緣があるのだ。

だが、それは三十年前のことだつた。おつさんの他に誰も知らなかつた。おつさんも今迄この暗い物語を、娘の明子に聞かせることは控へてゐた。明子は今日初めて知つたのである。

『さうだ。お前達は從姉弟だ』

おつさんは、ボロ〳〵落ちる涙を拭はうともしなかつた。『儂の弟の茂は、名譽の戰死をしたんだ。よくやつてくれた。有難い』

『全く奇遇でしたねえ。僕がウインドウ屋時代にお世話になつたYさんが、おつさんの實の弟さんだつたなんて——。お名前が變つてたので、ちつとも氣がつきませんでした』

やゝあつて石光が感慨深かげに云つた。『それで、おつさんは明日亮ちやんと一緒に亮ちやんの家へ行くんですね』

『あゝ。東京のお宅には亮坊のお袋さんもお祖父さんもおいでだ。皆さんにお目にかゝつてそれから、改めて又、亮坊を此處へ連れて來ますア。せめて學校の休みの間だけでも此處にゐて、うんと體を丈夫にするんだなア。なア亮坊』

おつさんは優しく亮ちやんに云つた。最早や、亡弟の戸籍のことなんか、問題ではないらしかつた。

『よかつたなア、亮ちやん』

石光は亮ちやんの頭を撫でて『さア、これで、この部屋の年代記は又一つ變るんだ。いよ〳〵僕は明日お暇しようかなア』

石光は立ち上つて、出してあつたトランクの前へ行つて坐つた。

『石光さん。やつぱりお歸りになるの？』

明子の聲が追つて來た。しかし石光は返事をしなかつた。トランクの蓋を開けて、日記帳などをめくつてゐたら、急に悲しくなつた。ああ、やるせなき片戀の日記よ。

『月末までいらつしやる豫定だつたでせう。どうして急にお歸りになるの？』

今度は耳許で彼女の聲がした。石光はビックリして振り返つた。何時の間にか寄り添つて來た明子の眼には、怨む樣な、責める樣な色が出てゐた。

『明子さん。鷲の翼は生え揃つたけど、ぼ、僕の心の翼は、か、か、片――』

石光は後が云へなかつた。

『どうなすつたの？　しつかりして下さいよ。石光さん、明日から又臨海寮の第四班が來るでせう。貴方がいらつしやらないと、子供さん達が可哀想ですわ。貴方は靖國の遺兒達にとつて、大事な大事な方よ』

『あ、第四班――』

石光はハツとした。さうだ、新しい子供達が明日から來るのだつた。圖畫の指導をしなければいけない。あの、汚れなき、健かな小さき者達の瞳！　それを思ふと、石光は途端に不思議な元氣が出た。

『明子さん。貴女は朝日屋の二男が好きなんでせう？』

元氣が出たお蔭で、石光は今日まで胸の中で惱んでゐたことを思ひ切つて聞くことが出來た。

今まで何うしても聞けなかつたのだ。

『まア、飛んでもない！』

明子は彈く樣に云つた。微塵も、遲疑の影がなかつた。

『しかし、あの肖像を見て貴女が「似てる」と云つたのは、それは朝日屋の次男のことぢやない

ですか』

壁に貼つた「Y氏の肖像」を指さしながら、石光は尋ねた。彼女の實店であの次男と逢つた時以來、石光はひそかにその疑ひを抱いてゐたのだ。

『あら。あの方と似てるかしら？　ちつとも似てやしないわ』

明子は案外だといふ顏で、肖像畫と石光の顏を見較べてゐたが、突然彼女の眼は生々と輝いた。『あゝ思ひ出したわ。あの肖像畫に似てるのは、家のお父さんだつた。お父さんの若い時にソツクリよ』

『え、え？』

『どうも誰かに似てると思つたけど、まさか家のお父さんとは思はなかつたのよ、私――』

『これは驚いた。でも、Yさんとおつさんは兄弟なんだから、似てるのは當り前ですね。餘り近過ぎて判らなかつたんですね』

『ホヽヽ、燈臺下暗しね。でも、石光さんが私の叔父さんの肖像を描いてゐて下すつたなんて、思へば深い緣だつたのね』

明子は石光の顏を見て微笑んだ。言葉にこそ出さなかつたが、彼女の眼には、「我汝を受す」と出てゐた。「靖國の遺兒にとつて大事な方」は彼女にとつても「大事な方」だつたのだ。

『な、何？　燈臺下暗しだつて？　馬鹿なことを云ふでねえ。あれを見ろ、あれを』

おつさんは二人に呼びかけて壁の方を指さした。

『さうですね。燈臺の下は暗くないなア。魂と魂の世界だけは、何時も燈臺下明るしですね』

感激の聲が石光の唇から洩れた。壁の方へ目をやつた瞬間、石光はそこに、崇高な魂の燈臺を發見したのだ。

壁に貼られた肖像畫の前に、さつきから亮ちやんが立つてゐた。

『お父さん！』

「Y氏の肖像」に向つて、亮ちやんは呼びかけた。涙にうるんだ亮ちやんの眼に、肖像畫の唇が微かに動いたのが映つた。

『亮一』

亮ちやんはハツキリ聽いた。それは父の聲だつた。

戀人の内職

一

文代さんは陽氣な娘さんである。

何時もこの原ツぱへ來て、町内の子供達と唱歌を歌つたり、おはじきをしたりして遊んでゐる。今日も文代さんは、乾物屋の新公、駄菓子屋の妙ちやん、古着屋の花ちやんと云つたチビの一黨を引き連れてやつて來た。

『今日は何をして遊びませうね』

文代さんは、睫毛の長い目で、男女混成軍を見渡した。

『陣取りがいゝや』

新公が呶鳴つた。

『うん。それがいゝや』

煙草屋の孝ちやんが賛成した。

『あたし、飯事がいゝわ』

これは古着屋の花ちやんだ。

『あたしも――』

『あたしも――』

たちまち女の賛成者がある。文代さんは困つた。

『あたいも入れて呉れない？』

其處へ小さい女の子がやつて來た。見ると、町内の子ではない。

『あんた、誰あれ？』

文代さんは訊いた。

『僕知つてる。あの、何時もこの原ツぱへ來る小父さんと遊んでる子だよ』

孝ちやんが説明した。

『あら、さう。どうしたの？』

文代さんは俄然、警戒の色を示した。文代さんと同じ様に、小さい子供達を率ゐて、よくこの原ソぱに現れる若い男があるのだ。その男は、耳や鼻からキヤラメルを出す魔法を演じたり、逆立ちをして見せたりするので、こちらの男の子達は直ぐ『あの小父さんの方へ行きたい』と云ひ出すのだ。文代さんは、それが癪に觸つてならないのだ。こちらの縄張りを荒らす憎い男だと思つてゐる。

『先生が病氣で、遊んで貰へないの。それで此方へ來たのよ』

女の子だけに、文代さんと遊びたいらしい。

『先生？　あの小父さん、先生なの？』

文代さんは吃驚した。

『さうよ。繪の先生よ。あたいの顏も描いてくれたわよ』

女の子は威張つた。

『まア、繪の先生？　可笑しな繪の先生ね』

文代さんは笑つた。實は文代さん、どうも得體の知れない男だと思つてゐたのだ。遠くから見てるだけだから、ハツキリしたことは判らないが、年の頃は三十前後で頭の毛はモシヤモシヤ、着てるものと云へば何時も古ぼけたジヤケツ、と云つて、只のルンペンらしくない物腰も見える。

『病氣つて、何處が悪いの？』

『あたい知らないけど、とても唸つてたわよ。死ぬかも知れないわ』

『誰か、家の人は居るの？』

奥さんが居るかとは、文代さんは聞けなかつた。文代さんはまだ二十である。

『うゝん。誰も居ないの。先生は獨り者よ』

この邊の子供は、ませた口を利く。

『お醫者さんは？』

これが持つて生れた性分で、文代さんは氣の毒な話を聞くと、默つてゐられない。敵たがら、心配になるのだ。

『お醫者さんなんか呼べやしないわよ。先生は貧乏なんだもの。この頃は電燈も停められてるわよ』

『相當なもんね。第三期だわ』

文代さんは獨り言を云つた。知らない人が聞くと肺病か何かの第三期かと思ふかも知れないが、文代さんの云ふ意味は、貧乏の第三期なのだ。家賃を拂へないのが第一期、米屋へ拂へないのが第二期、それが第三期になると電燈や瓦斯がとまる。文代さんの家などは、始終第一期と第二期を往復してゐるが、まだ第三期には到らない。だが、貧乏人の氣持は貧乏人だけが判る。文代さんは、じつとしてゐられなくなつた。

『先生の家、遠いの？』

『近いわ。八幡樣の裏よ』

『あんた案内してよ。あたし行つて見るわ』

文代さんは立ち上つた、配下の連中もゾロ〳〵と後から踵いて行つた。この連中は何處へ行くにも文代さんから離れない。それをいゝことにして、近所の裏店のお神さん達は、大掃除とかお祭りの前の日とかには、定つて文代さんのとこへ子供を連れてやつて來る。

『文代さん。今日もお頼みするわよ』

『えゝ、いゝわ』

文代さんは二つ返事で、町内中の茶目子や凸坊を引き連れて原ツぱへ出勤するのだ。文代さんは銀座の酒場に出てゐるので、晝は暇である。暇な時でも、文代さんは映畫を觀たり男の友達と遊ぶことは好きでない。子供達と遊ぶのが一番樂みなのだ。だから酒場では『變り者の文さん』で通つてゐる。

一

先生の家は、文代さんの町とは反對の方角だつたが、成程、さう遠くはなかつた。

『此處よ』

案内役の女の子は立ち停つた。見ると、妙な家である。獨立家屋ではあるが、部屋は六疊の間一つだ。附いてゐるものは、便所と臺所と、形ばかりの緣側だけ。玄關は、あらぬ方を向いて、しかも雨戸で嚴重に閉めてある。客は緣側から直接六疊の間へ侵入する樣に出來てゐる。

『先生イ』

女の子が呼んだが、返事はない。

『構はないから入んなさいな』

女の子はさう云つて、緣側から上つて障子を開けた。

『あら。誰も居ないぢやないの』

文代さんは覗き込んだ。

『先生は押入の中に寢てるのよ』

女の子はカーテンの下りてゐる押入を指した。

『まア、病人が押入に――?』

文代さんは呆れた。

『先生。お客さんよ』

女の子は走つて行つて、カーテンを引いた。

『誰だ』

先生は青い顏を出した。見ると、例のジヤケツを着たまゝで、押入の上段に、汚い蒲團にくるまつて寢てゐる。

『な、何だつて、あんな人を連れて來たんだい？』

先生は文代さんを見るや、赤くなつて吃りながら女の子を叱つた。

『御病氣ですつてね』

文代さんはニツコリ笑つて見せた。

『僕のことは構はんで下さい』

先生は甚だ無愛想だ。

『まア、いゝお天氣ねえ』

文代さんは、仰せに從つて先生には構はないで、緣側の明るい陽射しを眺めてゐたが、

『かうお部屋が散らばつてちや、お蒲團は布けないわねえ。押入に寢るのも無理ないわ』

と云ひながら、子供達を指揮して、畫布や本で一杯になつてゐる部屋を片付け出した。

『綺麗になつたわねえ。それぢやこの机を日向へ出しませう』

文代さんは長方形の机を日向に持ち出した。

『どうするの？』

新公は不思議さうに文代さんの顏を仰いだ。

『ベツドを作るのよ』

『ベツド？』

裏店の子供達はベツドなどといふ氣の利いたものは知らない。

『病院へ行くと、皆ベツドに寢るのよ。いゝわよ』

文代さんは押入の先生を見て笑つた。

『さう？　これがベツドなの？　僕、寢てもいゝ？』

孝ちやんが病人を志願した。

『いゝわよ。寢てごらんなさいな』

『すごいゝ』

早速机の上に寢た孝ちやんは大聲で叫び出した。

『八幡樣の森が見えらア。葉つぱが靑くて、風に搖れてらア』

『何だつて？　寢ながら森が見えるのかい？』

先生が押入から首を出した。

『どう？　先生もいらつしやらない？　押入は陽が射しませんから、病氣によくありませんわよ』

文代さんは潮時はよしと見て、先生に忠告した。

『いや、押入も仲々捨てがたいんでねえ』

『出ていらつしやいよ。この机の上にお蒲團を布いたら、理想的なベツドになるわ』

『その机だけちや、短いよ』

文句を云ひながら、先生は押入から出て來た。思つたほど重態ではない。

『さうね。先生には少し短い樣ね。ちよつと待つて下さい』

文代さんは臺所から飯臺を持つて來て、机に繼ぎ足した。ところが飯臺の方は二三寸低かつたので、脚の下に本を當てがつて平にした。その上へ、押入から蒲團を出して來て布いて、

『さア、ベツドが出來ました。どうぞ——』

文代さんは先生を招いた。

蒲團まで出されたんぢや仕方がない。それでは寢てみるかな』

先生は眩しさうな顏をしながら、ベツドへもぐり込んだ。

『お熱があるんですの？』

文代さんはベツドを覗きこんだ。

『うん、少し——。お腹を冷やしたと見えて、昨夜は酷い熱だつたけど、もう大分いゝです。でも昨夜眠れなかつたもんで、眠いや』

『ぢや、さうやつてお寢みなさいな』

文代さんは、立つて障子を閉めた。蜂の羽音が何處からか聞えて來た。雨上りの初夏の空氣は青葉の匂ひに溢れてゐた。子供達は壁に貼られた外國の銅板畫などを物珍らしさうに、大人しく眺めてゐた。

三

何時の間にかベツドから、微かな寢息が洩れて來た。文代さんは小さい聲で子守唄を歌つた。

笛や太鼓にさそはれて
山の祭りに來て見れば
日暮はいや〳〵里戀し
風吹きや木の葉の音ばかり——

あれから何の位時間が經つたか分らない。

先生は、ふと眼が醒めた。

『お熱はもう無い樣ね』

女の聲がしたので、吃驚して振り向いた。

『貴女はまだ居てくれたんですか』

『えゝ』

ベツドの傍に寫生用の三脚にかけてゐた文代さんは、長い睫毛を伏せて笑つた。

『子供達は？』

先生はもう、無愛想ではなくなつた。寢醒めの枕許に人が居てくれるといふのは嬉しいものだ。

『先刻まで居ましたけど、歸りましたわ。ベツドが餘程氣に入つたと見えて、病氣になつたら此處へ來て寢るんだつて云つてましたよ』

『誰が？』

『あたしの子供よ』

『貴女の子供？』

『つまり、あたしの町内の子供よ。先生の方の子供と區別したのよ』

文代さんは、子供のことになると、忽ちこの先生と對抗意識になるらしい。

『貴女も、「あたしの子供」と云ふのか』

『ちや、先生も、さう仰有るの？』

文代さんは笑つた。

『いや。僕ぢやないです――』

先生は言葉を濁らした。文代さんは、急に憂鬱になつた先生の顏を、不思議さうに眺めてゐたが、

『あたし、さう思ひましたわ。子供のベツトを二つ三つ拵へて置いて、病氣になつた子供を看病してやつたらいゝだらうと』

『子供の病院か――』先生は我が意を得たりとばかり、『僕もさう思つてるんです。この前の歐洲戰爭の時、フランスのベルダンの近くに、子供の野戰病院があつたさうですがね、初めはベツドが八つしかなかつたのが、二三ケ月のうちに百近くのベツドになつたさうだ。それも皆、持ち寄りの間に合せのベツドだけど――』

『まるで、このベツドの樣ね』

文代さんは笑つた。よく笑ふ娘さんだ。かういふ人は、貧乏の中にも病氣の中にも笑ふ種を見付ける。

『この邊の子供達にも野戰病院を建てゝやりたい。これが僕の理想だ』

『だつて、戰爭もないのに野戰病院は可笑しいでせう』

『いや。この邊の子供は皆負傷兵ですよ。毎日兩親の啀み合ひや貧乏の辛さを見てゐるので、自分達も喧嘩好きになつたり、ひねくれたり、嘘つきになつてゐる。皆、可哀想な負傷兵だ』

『あゝ、さういふ意味ならね』

『かう見えても、僕だつて負傷兵ですよ』

『貧乏の――？』

『貧乏！　貧乏なんか問題ぢやないさ』先生は寂しく笑つて、『今も醒め際にその夢を見ましたけどね、僕は病氣になると、きつと兩親の夢を見るんです』

『ちや、兩親とも、もう居らつしやらないのね』

『二人とも死にました。生きてる間中、僕が病氣になると、喧嘩をしてね』

『まア、御兩親が――？』

『父は僕に藥を服めと云ふんです。ところが、母は頑固な宗派に凝りかたまつてゐて、藥を服まないでお祈りで療せと云ふんです。どちらも僕のことを思つて云つてくれるんですがね、僕は二人に挾まれて苦しかつた。實際、病氣よりもその方が苦しかつたですよ』

『そして先生は何うなすつたの？』

僕は母の血を餘計受け繼いだと見えて、藥を服まないで通しましたがね、どうやら死ぬ樣なこともなく、この通り生きてゐますよ。お蔭で、貧乏しても醫者にかゝらないで濟むから、結局よかつたかも知れない』

先生はまた寂しく笑つた。この先生は笑つても寂しい。文代さんは寂しくても笑ふ。いゝ取組だ。

『でも、今になつて考へると、父が可哀想でした。お願ひだから藥を服んでくれつて、涙を流してゐましたからね。その傍で、母が、服んぢやいけないつて僕に喙しかけるんだから、父の心中さぞ辛かつたらうと思ひますよ』

『先生だつて辛かつたでせう』

『そりや――。だから病氣になるとその夢を見るんです。先刻も見ました。父が諦めて、寂しい後姿を見せて自分の部屋へ立つて行くと、母は僕の枕許で子守唄を歌つてくれたんです』

『子守唄を？』

『えゝ。それから額に氷嚢を當てゝくれました』

さう云つて先生は、ふと氣が付いて自分の額に手をやつて見ると、何時のまにか、冷やした手拭が載つかつてゐた。

『おや。貴女がしてくれたんですか』

先生は文代さんの顏を見た。文代さんは笑つて答へなかつた。

『まるで夢と同じだ。それぢや、あの子守唄も――？』

訊かれて文代さんは赤くなつた。

『あら。先生の耳の穴から毛が生えてますわね』

文代さんは照れかくしに、こんなことを云つた。

『生えてるでせう』

成程、先生の耳の穴から黒い毛が覗いてゐる。

『どうして剪つちまはないんですの？』

『いや、これも仲々捨てがたいんでね』

『押入が捨てがたかつたり、耳の毛が捨てがたかつたえ』

文代さんは笑つた。

『貴女が笑ふと、まるで子供みたいだ。シヤアリー・テムプルに似てる』

『お店でもさう云はれるのよ。色氣がないつて』

『お店？』

『えゝ、あたし勤めてるのよ』

文代さんは又赤くなつた。

『だつて、晝日中子供と遊んでるぢやないですか』

『あたしのは、夜のお店よ。酒場よ』

『酒場？　これは驚いた。貴女はちつとも女給さんらしくないわよ。酒場へ來る繪描きさん達は、もつとスマートで、もつと――』

『もつと？』

『いゝのく』

文代さんは慌てゝ手を振つた。若し云へば、もつと金持とか、もつと好男子とか云ふところだつたが、どちらも文代さんの好きな言葉ではなかつた。

『ねえ先生、先生の理想の子供の病院が出來たら、あたしを看護婦にして下さらないっ』

文代さんは話題を外らした。

『さア――』先生は苦笑した。

『あたし、子供達のベツドの傍で子守唄を歌つて上げるわよ』

『子守唄はいゝですね』

先生は先刻の夢を思ひ出した。

『だから、あたしを使つて下さらないっ』

『でも。實は僕、女の人は好きぢやないんです』

先生は云ひ難さうに云つてから、

『でも貴女は、子供には好かれますね』と妙なお世辭を云つた。

『あたし、もう歸るわ』文代さんは憤然と立ち上つたが、

『先生は電燈を停められたんですつてね』

『誰がそんなことを――』

『先生の方の女の子が云つてましたわ』

『飛んだところで貧乏が發れたもんだ』

先生は苦笑した。

『先生が貧乏だと聞いたもんですから、それであたし、やつて來たのよ。さうでなけりや、男の人のところへなんか誰が來るもんですか。あたし、男の人は好きぢやないんですもの』

文代さんは見事仕返しをした。

四

『今日もあの先生來ないのねえ』

花ちやんが云ひ出した。

『さうねえ』

文代さんも、實はそのことを考へてゐたところなので、つい相槌を打つた。あれ以來、先生とその一黨はこの原ツぱに現れないのだ。

『どうしたんでせう。まだ病氣かしら？』

妙ちやんが心配した。

『姉ちやん。あの先生のとこへ行つて見ようよ。繪があつて面白いよ』

文代さんはこの連中から姉ちやんと云はれてゐるのだ。

『ベツドもあるよ』

男の子が騒ぎ立てた。

『行つて見ませうよ』

女の子達も賛成した。

『だつて――』

と云ひながら、文代さんも何時の間にか立ち上つてゐた。子供達を彼處へ連れてゆくと、大事な子供を先生に皆取られてしまひさうで、危いと思ひながら、脚はひとりでにあの先生の家の方へ歩いて行くのを、文代さんは不思議に思つた。

『捨てがた先生。その後如何？』

文代さんは、先生の家の縁側から覗いた。

先生は子供達に圍まれながら、畫布に向つて、その中の一人の子の顏を描いてゐたが、

『捨てがた先生――？』と怪訝な顏をした。

『捨てがたい〳〵が口癖だから、先生は捨てがた先生よ』

文代さんは遠慮なく座敷に上つた。

『さうか。僕の綽名か』先生は平氣なもので、そのまゝ畫布に向つたが、

『この間はどうも――』

と、思ひ出した様に頭を下げた。

『餉臺をベツドに取られて、お困りでせう』

文代さんはあの時のまゝになつてゐるベツドを眺めながらお愛想を云つた。

『なアに、ベツドで飯を食ひますからね』

文代さんは、何て無精な先生だらうと、呆れた。

『僕も、顏を描いてもらひたいなア』

新公が羨しさうに彼方の子を見て云つた。

『あゝ。描いてやらうね、後で』

先生は柔和な目で振り返つた。

『先生。あたしの子供を椿はないで下さい』

文代さんは異議を申し立てた。

『また、「あたしの子供」――か』

先生は厭な顏をした。

『だつて大事な子供を、人手に掛けたくないんですもの』

『それなら連れて來なけりやいゝ』

どうも子供のことになると、お二人は不穩になる。

『詰んないなア』

大人の不和は直ぐ子供に響くと見えて、妙ちやんは愚痴をこぼし出した。

『ちや姉ちやんが唱歌を歌つて上げませうね』

文代さんは優しい聲で歌ひ出した。

雨ふりお月樣　雲のかげ
　お嫁に行くときや　誰とゆく
ひとりで唐傘　さして行く——

『いゝわねえ』

先生の方の女の子が、チヨコ〳〵とやつて來た。

『いらつしやい。あんたにも教へて上げませうね』

文代さんは歡迎した。

『もし〳〵。僕の子供に構はないで下さい』

今度は、捨てがた先生が抗議を申し込んだ。

『姉ちやん。姉ちやんは誰のお嫁さんになるの？　あの先生のお嫁さんになるの？』

孝ちやんは、捨てがた先生を指した。

『孝ちやんの馬鹿。誰が、あんな人の——』

文代さんは腹立ち紛れに呶鳴りつけたが、顏は眞赤になつてゐた。

捨てがた先生はと云ふと、聞えない振りをして繪を描いてゐた。耳の毛はかういふ時に役に立つらしい。

その時、ドタバタと緣側から驅け上つて來た男の子がある。

『やい。退け。僕にも見せろい』

その子は、大人しく先生の繪を見てゐる子供達を押し退けて前に出ようとした。

『駄目だよ正ちやん。狡いよ』

他の子が迷惑さうに云つた。

『何を。殿るぞ』

亂暴な子である。文代さんは吃驚して眺めた。

『正坊。また家で怒られて來たな』

先生は笑ひながら立ち上つて、その暴れつ子を抱き上げた。

『怒られなんかしないやい。先生の馬鹿』

抱かれながら、その子は先生の頭を殴つた。先生は、顔も顰めずに、平氣なものだ。暫く殴らせて置いてから、

『どうだ。その位殴つたら癇癪は治つたらう。さア、もう大人しくするんだよ』

と、靜かに抱き下ろした。すると不思議に、その子はケロリと大人しくなつた。

『家庭の負傷兵は、かうして療すのに限りますよ』

先生は文代さんの方を見て笑つた。

『あたしなら、そんな子は遊んでやらないわ』

文代さんは呟いた。

『いや、こんな子でも仲々捨てがたいですよ』

捨てがた先生は愈〻その本領を發揮した。これには文代さんは、さすがに心を撃たれた。

『ベツドは一つしかありませんけど、このお家はもう立派な子供の病院ね』

『どうして？』

『だつて、さうして小さな負傷兵をお療しになるんですもの』

『いや、まだ病院としては不完全ですよ』

『あたし、先生にお金を儲けさして上げたいわ。そしたら綺麗なベツドが買へるでせう』

『金なんか儲かりつこないですよ』

『先生の繪、賣れないんですの』

『そりや稀には賣れますがね、僕は子供の繪が專門なんで、どうしても販賣區域は狹いですね』

『僅の繪もお描きになるといゝわ。あたし、モデルになつて上げませうか』

『有難う。でも僕は、女の人は好きぢやないんでね。殊に――』

『殊に？』

『いや、何でもないんです』

『分つてますわ。どうせ、あたしなんか――。さア、歸りませうよ』

文代さんは怒つて、子供達を連れて先生の家を出た。

『お母さん。あたし女給なんか罷めたい』

裏長屋の家へ歸るや否や、文代さんは、たつた一人の阿母さんを困らした。女給なんかしてるから、あの先生に輕蔑されるんだと、思ひ込んでしまつたのである。

五

あれから暫く文代さんは先生と語り合ふ機會がなかつた。先生の家へも行かないし、原ツぱで一緒になつても、遠くから眺めるだけだつた。

輕蔑されてゐると思ふと口惜しかつたが、その癖、妙にあの、貧乏で無精で子供好きな先生のことが忘れられなかつた。家に居ても酒場に居ても、氣が付いて見ると、何時も先生のことを考へてゐた。

溫い雨の降つてゐる晩だつた。文代さんは早出の番だつたので、まだ客の來ない酒場の片隅で夕刊を讀んでゐた。

『あら』

文代さんは思はず聲をあげた。社會面のトップに大きく出てゐる若い男の寫眞は、何と、あの捨てがた先生にソツクリではないか。

ハツと思つて記事の標題に目をやると『埋れ木に花咲く青年畫家』と出てゐる。

『まア、やつぱりあの先生だわ』

文代さんは、記事を讀み終つて、大きな溜息をついた。

記事に出てゐる町名も番地も、紛れもなくあの捨てがた先生である。先生が數年前、橫濱の外人出版會社から出た『世界の子供叢書』に描いた插繪が認められて、今度B國の有名な出版會社エム・エム社から出るE女王記念の兒童叢書の插繪を賴まれたといふ記事だつた。或る大學教授がその間の斡旋をしたといふことも出てゐた。

文代さんには先生の繪の良し惡しなんか判らなかつた。小學校を出たきりの彼女には、E女王記念出版といふのは何んなことか、勿論判らなかつた。たゞ、あの先生が急に偉くなつた樣に思はれて、それが嬉しい樣な悲しい樣な、遣瀨ない氣持になるのだつた。

『今でさへ、あたしは先生に輕蔑されてるのに、先生がこんなに偉くなつたら、あたし、それこそ辿も寄り付けないわ』

寫眞を見てゐるうちに、文代さんの目には涙がこみ上げて來たが、

『でも可笑しな先生ねえ。先生は、押入とか耳の毛とか惡戲小僧とか、變つた物と云へば捨てがたい癖に、「變り者の文さん」で通つてるあたしを、ちつとも捨てがたく思つてくれないんだもの。不都合な話だわ』

寂しい笑ひが文代さんの頰に浮かんだ。

横にさへなれば直ぐ眠る文代さんだつたけれど、その晩は家へ歸つて床に入つても、なか〳〵寢つかれなかつた。

『あたしみたいに不運な女はないわ。でも先生は、偉くなつていゝわね』

同じことを幾度も〳〵考へてゐるうちに、何時の間にか、子供の樣に眠つてしまつた。寢顏を見ると、長い睫毛は涙で濡れてゐたが、唇はあどけなく、先生の幸福を祝福するかの樣に微笑んでゐた。

六

翌る日、文代さんは一人で先生の家を訪ねた。

先生は縁側に立つて、楓の青葉を眺めてゐた。朝の陽を受けてゐる所爲か、今日はとても血色がいゝ。

『やア、しばらくでしたね。金蠅はどうしました？』

先生は文代さんの姿を見て笑つた。

『金蠅――？』

『貴女の子供達ですよ。何時も貴女に群つてゐるから、それで金蠅』

『あら、子供達が金蠅ですつて？　ぢやあたしは――？』

『うんこ』

さう云つて先生は部屋へ驅け込んだ。腹を抱へて笑つてゐるらしい。文代さんに『捨てがた先生』と云はれた仇討らしい。

文代さんも、かういふ冗談は好きである。何時もなら一緒に笑ふのだつたが、今日はどうしても笑へなかつた。そのまゝ、縁側にションボリと腰をかけた。

『入りませんか。今日は御馳走がありますよ』

先生は中から景氣のいゝ聲をかけた。

『先生。お目出度うございます』

文代さんも、景氣よく云はうとしたが、うまく聲が出なかつた。

『あ、もう知つてるんですか』

先生は飛び出して來た。

『夕刊で拜見しましたわ』

『僕もやつと芽が出ましたよ。大學の教授がやつて來てね、僕に、描けつて云ふんです。驚きま

したよ』

先生はもう有頂天だ。

『B國でE女王の名に因んだ子供の病院が建つんでね、その資金のために豪華版の子供文學叢書が出るんださうですよ。その中の三冊、日本と印度と支那の、三冊のお伽噺の插繪を僕に賴みに來たんです』

『いゝですわねえ』

『ところが、その教授がね、この家ぢや困るつて云ふんです。自動車も入らないし、電話もないし。もつと便利なところへ越してくれつて云ふんですがね、僕、どうしようかと迷つてるんですよ』

あゝ、やつぱりさうだ。先生はもう、こんな貧民窟の先生ではなかつたのだ。

『でも、この家も捨てがたいし——』

先生は呟いた。

『さうですわ。それに、あたし達の子供だつて可哀相ですわ』

文代さんは、思はずガナリ立てた。

『え？　今、貴女何て云ひました？』

先生は聞き返へした。

『あたし達の子供だつて——と云つたのよ』

『あたし達の子供？　どうして、何時もの樣に、「たつて——」』

文代さんは赤くなつた。文代さんは、この場の切羽つまつた遣瀨ない氣持から、今までの樣に、あたしの子供、先生の子供と、區別を立てる餘裕もなく、つい、あたし達の子供と云つたのだ。

『僕は今まで、貴女の口からその言葉を聞きたかつたんです。貴女は初めて會つた時から、あたしの子供、あたしの子供つて云つてましたね。あの言葉位、僕の嬉ひな言葉はないですよ』

『あら、どうして？』

文代さんは長い睫毛の目を瞠つた。

『あの言葉は僕の母の口癖だつたんです。僕のことで父と喧嘩する度に、母は「これはあたしの子供ですから、あたしの思ふ通りに教育します。貴方は構はないで下さい」つて云ふんですよ。母は信仰に凝つてゐたといふのか、萬事その調子で、貴方は貴方、あたしはあたしといふ風に、父を無視してゐました。小さい時は矢張り母に懷きますけど、今になつて見ると、父が可哀相で

すよ。氣の弱い父は到頭自殺してしまひましたけど、あの頃の父の日記を出してみると、不眠症の療法の切抜きがベタ〳〵と貼つてありますよ』

先生は涙を呑んだが、

『でも、貴女が今日、あたし達の子供つて云つてくれたので、僕は救はれましたよ。僕は貴女が好きだつたんですからね』

『あら。だつて先生は、女の人は好きぢやないつて仰有つたでせう。殊に——女給はお嫌ひなんでせう』

『殊に女給は——？　そんなこと云ひませんよ』

『仰有つたわよ。ほら、この前あたしが來てモデルになつて上げませうかつて云つた時、僕は女の人は好きぢやない。殊に——つて』

『あゝ、あれか。あれは違ひますよ。飛んだ誤解だ。「あたしの子供」なんて云ふ人は殊に嫌ひだと云ふ積りだつたんですよ。僕の云ひ方が悪かつたんです』

『まアー。御免なさいね、あたしスツカリ怒つたりして——』

『それで、貴女はあれから來なかつたんですか。僕は寂しかつたんですよ』

『先生』文代さんの聲は顫へた。『やつぱりこの家をお越しにならなけりやいけませんの？』

『やめました。僕はこの家に居ます。この家にだつて電話は引いて呉れるでせう』

『でも先生は、もつと綺麗な、ベツドの澤山ある子供の病院をお建てになるんでせう』

『僕の病院には、綺麗なベツドなんか、實は何うでもいゝんですよ。僕のは、子供の心の傷を癒す病院ですからね。でも、もう此のまゝで完全な病院になりました。優しい子守唄を歌つてくれる看護婦さんが出來たから——』

『まア、あたしを看護婦にして下さるの？　嬉しいわ』

文代さんは、あどけなく笑つた。

『看護婦は內職ですよ』

『あら、本職は何アに？　女給？』

『馬鹿な。本職は僕の戀人——』

『先生』

文代さんの肩は顫へた。泣いてゐるのだ。

驢馬と特急

一

『秋山さんは、さうしていらつしやる所を見ると、些とも質屋の息子さんらしくありませんね』

官舍夫人は餉臺を拭きながら緣側の籐椅子でカメラ雜誌を讀んでゐる秋山君を見て笑つた。

『さうですか。何に見えますかね』

秋山君は苦笑して振り返つた。

『まあ文士か、繪描さんでせうね』

『さうだ。秋山君は人相學から云へば藝術家だね。骨相學から云へば兵隊さんかナ。扁平胸が卿か缺點だけど――』

腹逼になつて新聞を讀んでゐた頭蓋骨博士が、不意に意見を發表した。

頭蓋骨博士といふのは、この第一號官舍の長男で、少壯人類學者である。帝大の理科を出て、今は丸見博士の人類學教室の助手をしてゐる。最近、博士のお供をして北支や蒙古の學術旅行から歸つて來たが、夏休みを利用して湘南の實家へ來て、熱心に博士論文を書いてゐる。その論文の題が『頭蓋骨に就いて』といふのだから、無學な連中が面白がつて、彼のことを頭蓋骨博士と

呼んでゐるのだ。

この頭蓋骨博士と秋山君とは、中學時代の同窓である。人類學者と質屋の倅では、取合せが妙に思はれるけど、二人とも變り者だから、實に仲がいゝ。秋山君は質屋の次男の癖に寫眞の名人である。初めはカメラ雜誌の月例懸賞に當選したのがスタートだつたが、今ぢや、その道では玄人扱ひを受けてゐる。久しぶりで歸省してゐるから遊びに來ないかといふ頭蓋骨博士の葉書を見て、早速この第一號官舍にやつて來たのも、實は海の寫眞を撮りたかつたからだ。夏は質屋は閑だから、親爺さんも許してくれた。家に居れば、これでも秋山君は店に坐つてゐるのだ。次男だから、やがて質屋の暖簾を分けて貰ふことになつてゐる。

『さうか。やつぱり僕の人相は藝術家かな。寫眞は藝術だからね。流石にダゲール第二世は、爭はれんな』

秋山君はニヤ〳〵した。恰度、寫眞の開祖ダゲールの百年祭のある夏だつたので彼は頻りにダゲールを自稱してゐるのだ。

『でも秋山さんは、ちつとも海へ撮りにいらつしやらないぢやありませんか。夏の海は、海水着の娘さん達とビーチ・パラソルのカクテルで、カメラの好材料ぢやありませんゝ』

官舍夫人は仲々モダンなことを仰有る。云ひ遲れたが、この小母さんは、東海道線の〇驛の驛

長夫人である。驛の直ぐ近くに官舍の一廓があつて、その第一號官舍の奥様なのだ。小さい町だから、第一號官舍夫人と云へば、威張つたものである。事實、この町の愛國婦人會の會長さんだ。

『僕は、海岸の女達は好きぢやないですよ。皆、眼が上すつて妙に人目を氣にして——。僕は海へ行つて見て失望しました』

秋山君は雜誌を繰りながら答へた。

『さうだ。海水着の女は肉體美だなんて云ふけど、裸の女は要するに、標本だからね』

頭蓋骨博士が贊成した。

『まア標本なんて、まるで昆蟲みたいなことを——。貴方方は若い癖に浮世離れがしてゐるわねえ』

官舍夫人は笑つたが急に思い出した様に、

『あゝもう門征兵士を送る時間だ』

と、そゝくさと支度をして出て行つた。

やがて驛の方から勇壯な軍歌が聞えて來た。つん裂く様な萬歲の聲が響いて來た。秋山君は讀んでゐた雜誌を投げ出して、愛用のカメラを持つて驅け出した。

彼は、この町から出征兵士が出る時は、必ず驛へ來て、その有樣を撮影するのだ。送る人も送られる人も、皆眞劍な表情だつた。若い細君を慰める老婆があつた。老婆を慰める若者があつた。恁ういふ銃後の情景ほど秋山君の心を動かすものはなかつた。それに較べれば、海に曜る女達など、全く生命のない標本の様に思はれた。

愈〻最後の萬歲だつた。秋山君は、撮り終つた寫眞機を右手に差し上げて、腹の底から萬歲を叫んだ。

二

全く、第一號官舍には恰で避暑地の空氣がなかつた。

御主人は勿論朝から驛へお勤めだし、夫人は愛國婦人會の仕事で、出征兵士の見送りや、家族の慰問訪問で暇がなかつた。頭蓋骨博士は論文を書いてゐるし、秋山君は驛頭の銃後寫眞を撮つてゐる。誰も、呑氣に海に行く者などないうちに、何時の間にか陽射に秋の色が漂ひはじめた。

秋山君はそろ〳〵東京へ歸らなければならなかつた。

『お名殘りに海を見て來ようかな』

愈〻歸るといふ日の夕方、秋山君はブラリと一人で海岸へ行つた。勿論カメラは携帶しなかつた。

海へ來て見たら、もう店終ひの準備をしてゐる氣の早い賣店もあつた。派手な天幕やパラソルも大分尠くなつてゐた。秋山君は態と人の居ない方で泳いだ。大きくうねる波の冷たさにも、秋が感じられた。

『おや――』

不圖、波から顏を出したら、直ぐ目の前に、斷髮の若い女がフハリフハリと波に乘つて浮いてゐるのと、顏を合はした。その女の眼は、ちつとも上ずつてゐなかつた。何か物思ひに耽つてゐる樣な、夢を追つてゐる樣な、不思議な眸だつた。一目見て、秋山君は何處かで見たことのある樣な顏だと思つた。だが、何うしても思ひ出せなかつた。秋山君は、もう一度女の顏を見直さうとした。その時である。後から猛烈な三角波が押し寄せて來て、秋山君は、頭からガブリとかぶつてしまつた。

『あつぷつぷ』

秋山君は惶てゝ波から頭を出した。

『あら』

斷髮の女は笑つた。ところが面妖にも、その女の笑顏が、急にボンヤリと、恰でピンぼけの寫眞みたいに、秋山君の眼に映つたのだ。

『お眼鏡がございませんわね』

云はれて初めて、秋山君は氣がついた。今の波で眼鏡を浚はれたのである。秋山君は酷い近眼だ。だから、海の中まで眼鏡をかけて來たのだが、それが不覺の原だつた。

『あれは一圓三十錢の眼鏡ですから、惜しくないです。でも、眼鏡がなくなつて、貴方の顏がハツキリ見えないのが殘念です』

秋山君は正直なところを告白した。人の名前や顏が思ひ出せないといふのは、奥齒に物が挾まつたみたいで、全く殘念なものである。

『ホヽヽ。あたし、東海岸の星野別莊に居りますのよ。お眼鏡を新調なすつて、あたしの顏を見にお出かけ下さいまし』

落ちついたお孃さんである。それに、物の云ひつぷりにも情味がある。秋山君は恁ういふ娘さんが好きなのだ。

『でも僕は、今晩東京へ歸るんです。殘念でした』

秋山君は殘念を連發して、そのまゝ岸の方へ泳ぎ歸つた。

『あ、さうだ。あのお嬢さんだつた』

砂濱に立つた途端に、秋山君は思ひ出した。昨夜現像した銃後のスナツプに寫つてゐたのが、あの令嬢だつたのだ。昨日、やはり驛頭で撮つた寫眞であるが、貧しげな五十恰好の婦人の手を握つて何か頻りに慰めの言葉を囁いてゐる洋裝の令嬢が、寫つてゐた。その寫眞は、今迄撮つたスナツプの中でも一番傑作だと秋山君は思つた。海では帽子も被らないでゐたし、洋裝と海水着とでは、感じが全然違ふので、咄嗟には判らなかつたが、確かにあの令嬢だつた。

さう思ふと、秋山君は餘計あの令嬢に心を惹かれた。松林の小徑を第一號官舍の方へ歩きながら、秋山君は餘程歸るのを二三日延ばさうかと考へた。あの寫眞を燒付けて進呈したら、彼女は屹度喜んでくれるだらうと思つた。

『しかし、相手は別壯のお嬢さんだ。こつちは質屋の次男坊だからなア。それに、寫眞を種に女に近寄るなんて、あまり好い趣味ぢやないからな』

秋山君は、頭を振つて呟いた。

その晩、秋山君は第一號官舍に別れを告げた。頭蓋骨博士は驛まで送りに來てくれた。

『O町を一枚呉れ』

秋山君は出札口で切符を買はうとした。

『えゝ』

出札係は變な顏で聞き返した。

『O町だよ』

秋山君は大きな聲を出した。

『君、O町は此處だよ』

頭蓋骨博士に肩を叩かれて、秋山君は初めて氣が付いた。

『いけねえ／＼。東京驛を一枚――』

『おい。O町の驛で、O町を一枚呉れなんて、よつぽどO町に心殘りがあると見えるね』

頭蓋骨博士が冷かした。何氣なしに云つた言葉だけど、この一言で秋山君は眞赤になつた。彼の頭は、O町の海で逢つた令嬢のことで一杯だつたのだ。

三

『おい、決心がついたかいゝ』

秋山君が入つて行くや否や、待ち兼ねた樣に大谷君は訊ねた。こゝは大森の、高級アパート雲

泥荘の一室である。

『決心――ッ。』

秋山君は怪訝な顔で椅子に腰を下ろした。

『分つてるぢやないか。家を出る決心さ』

大谷君は噛み付く様に云つた。久し振りで會つた友達に、いきなり家出の決心を聞くなんて、何とも氣の短い男である。これには秋山君も呆れた。

大谷君は今賣出しの探偵小説家だ。苦勞人で、以前は株屋の手代や工場の炊事夫までやつたことがある。原稿を書く様になつてからも貧乏が續いたが、その不遇時代に、よく秋山君の店の暖簾を潜つたものである。昔の人はよく考へたもので、暖簾は、ヌツと音もなく潜れば、忽ち上半身が隱れて了ふ。質屋や燒鳥屋には、持つて來いの代物である。だがその大谷君も最近は急に當り出して、秋山君の店の直ぐ近くの、この雲泥荘に仕事部屋を借りて置くまでに出世した。

不遇時代の大谷君の質種を何時も秋山君が、高く預つてくれたのが、緣の始まりで、今では二人は、質屋とお客の交際ではなしに、すつかり氣の合つた友達になつてゐるのだ。

『おや、いらつしやいまし』

其處へ雲泥荘の女將が麥酒を持つて來て、秋山君に挨拶した。大谷君がこの仕事部屋に來る時は必ず秋山君を呼ぶし、それに秋山君の店は一町と離れてゐないのだから、女將と秋山君は氣の置けない間柄である。

『家を出るつて云つても、さう簡單には出來ないからね。親爺が折角暖簾を分けてやらうと云つてるんで――』

女將が出て行つてから、秋山君はモヂ〳〵と辯解した。

『そんたことは、もう幾度も聞いたよ。僕は君の才能を惜むから忠告するんだぜ。今の寫眞界で、君位の才能ある男は一寸見當らんからね。今が大事な時だよ。僕だつて、株屋や炊事夫をしてゐたら、小說家にはなれなかつたんだ。君は一體、寫眞を棄てゝ質屋になるつもりか』

大谷君はむきになつて詰め寄つた。家を出て獨立しなければ立派な寫眞家になれないといふのが、大谷君の主張なのである。

『君がさう云つてくれる氣持は、よく判るんだけどね、親爺のことを考へると――』

『だ、だから君は駄目だといふんだ。意氣地なしでのろ〳〵で、まるで、驢馬みたいな奴だ』

『驢馬？　僕は、人相は藝術家で骨相は兵隊さんだと云はれたけど、驢馬と云はれたのは初めてだ』

秋山君は苦笑した。

『誰だい、人相だの骨相だのと云つた馬鹿野郎は――』

大谷君は、今日は何うも御機嫌が悪い。

『頭蓋骨博士だよ』

秋山君はO町の第一號官舎の話をした。

『何だ。君は海に行つてたのか。些とも陽に焼けてないぢやないか』

『餘り、海岸へ行かなかつたんだよ』

『それぢや、海の寫眞を撮つて來なかつたんだね。海の町へ行つて海の寫眞を撮つて來ないなんて、君がそんな怠け者とは知らなかつた。いよ〳〵驢馬だ』

秋山君、この所、散々である。秋山君は例の銃後のスナップの話をしたかつたのだけど、あれを話せば何うしても別荘の令嬢の件が出る。出れば必ず大谷君から冷かされるのが分つてゐたので、氣の弱い彼は、たゞニヤ〳〵してゐた。

『まア、麥酒でも飲めよ』

追がに少し云ひ過ぎたと思つたのか、大谷君は二つのコップに麥酒を注いだ。

『有難う』

二人とも麥酒は大好きである。飲むほどに呷るほどに、陶然たる氣持になつた。

『どうだ、秋山。これから酒場へ行かうか』

大谷君は、殺風景な仕事部屋では滿足出來なくなつたらしい。

『今日は一寸――』

『店が忙しいのか』

『別に忙しくはないけど、夏中遊んぢまつたので、親爺に義理を立てて、このところ謹愼してるんだよ』

『他人ぢやあるまいし、親爺に義理なんか要るもんか。交際へよ。僕はこの頃小説が書けなくて腐つてるんだ。氣晴らしに、一つウンと飲みたいんだ』

『また今度にしよう。今日は勘辨してくれ給へ』

秋山君も今日は珍らしく強硬だつた。以前は大谷君に誘はれて、ちよい〳〵酒場へも行つたものだが、海から歸つて來てからは、あの喧騒な酒場などへは、全然行く氣がしなくなつた。それよりは凝と一人で、例の別荘の令嬢のことを思ひ出してゐる方が樂しくなつたのだ。本音は、これなのだ。口實に使はれた親爺さんこそ、いゝ面の皮である。

『さうか。君がそんな友達甲斐のない奴だつたとは知らなかつた。君みたいな驢馬とは、僕は交際はん。僕は特急だからね　歸つてくれ』

大谷君は蒼くなつて怒つた。

『驢馬と特急ぢや、雲泥違ひだからね　仕方がない』

秋山君は苦笑して部屋を出た。廊下の所で女将と出逢つた。

『あら。もうお歸り？』

『あゝ。先生は、仕事が旨く行かないで氣が立つてゐるからね。うんと御馳走して上げて下さいよ』

云ひ殘して、秋山君は雲泥荘の玄關を出た。

四

大谷特急先生は、今宵もドダンス・ホールに現れた。（その頃は、まだダンスホールがあつた。）

先生は近頃頻繁に此處へ來る。先生の相手は、何時も若島靜子だ。先生は何うやら、この靜子孃に惚れてゐるらしい。小説が書けないのも、戀の仕業の樣である。

靜子孃は六十人のダンサーの中で二十三番目に坐つてゐるのだから、決して賣れツ子ではない　顏立ちも、どちらかと云へば地味で、目立つ方ではないのだが、何となく、特急先生はこの

靜子が好きなのだ。

『いゝ月だね』

先生は踊りながら、靜子に囁いた。ホールの窓の外には、秋の月が青く澄んでゐた。

『えゝ』

靜子は氣のない返事をした。

『戀を語るのに適はしい晩だね』

『さうかしら。あたし、戀を——思ひ出すのに適はしい晩だと、思ふわ』

靜子は、ゆつくり〳〵物を云ふ女だ。大谷先生は、これが好きなのである。先生は特急だから氣が短い。それだけに却つて、氣の長い悠長な物の云ひ振りが好きなのかも知れない。何時も目を細くして、靜子孃の言葉を一句一句、味はふ樣にして聞き惚れてゐるのだつた。

『えツ、戀を思ひ出す——？　君は戀人があつたのか』

さすがに、今の彼女の言葉だけは、先生の耳にピンと來た。ゆつくりと味はつてゐる餘裕なんか、なかつた。

『戀人——？　戀人と云へば、戀人かしらでも、彼方では、何とも思つていらつしやらないでせうから——』

靜子は斷髮の項を垂れた。

『だ、誰だ、相手は？』

先生は餘り敦圉いたので、ついステップを間違へて、隣で踊つてゐる青年の靴を踏んだ。

『痛いツ。氣を付けろ』

青年は先生を睨んだ。先生、彼女の戀の相手を知る前に、喧嘩の相手を作りさうになつたので苦笑した。

『相手の名前も知らない、戀なのよ。ほんの一寸、話をしただけなの。でも、眼の美しい、何處となく潤ひのある方だつたわ。屹度、藝術家だと思ふの』

靜子は窓の外の月を眺めながら物語つた。

『一寸しただけで、藝術家か何うか分るもんか』

『いゝえ。あたし達は大勢の男の方を知つてるから、案外當るのよ。あたし、人相學には自信があるわ』

『ぢや、僕の商賣は何だい？　當てゝ御覽』

『大谷さんは、さうねえ——質屋さんでせう？』

『えツ？』

これには泝石の特急先生も吃驚した。

『當つたでせう。眼が鋭くつて、テキパキして——あたしが行く質屋に、貴方にそつくりの次男坊がゐるのよ。近頃の質屋さんはモダンなのね。カフエにも行くし、ホールにも來るし』

『カメラ氣違ひの奴も居るしね』

先生は、秋山の驢馬公を思ひ出して可笑しくなつた。

『さうよ。質屋だつて、やり樣によれば、立派な公益事業ですものね。あたし達貧乏人には絶對に必要だわ。貴方もしつかり遣つて頂戴ね。大谷さんなら、屹度成功するわ』

大谷先生、飛んだ激勵を受けてしまつた。その時奏樂は歇んで、二人は離れた。

『畜生、到頭俺を質屋にしちまひやがつた』

何時もなら、何度も彼女と踊るのだつたけれど、特急先生今夜は腐つて、そのまゝホールを出た。

改めて、『僕は小說家だ』と名乘る勇氣も出なかつた。大谷君は小說には別名を用ひてゐるのだ　だから今更、『僕は大谷ぢやなくて、これこれだ』とペンネームを發表しても、本氣にしてくれる筈はなく、却つて僞物扱ひを受ける處れが充分にある。

そんなことを考へながら銀座を步いてゐたら、大谷君は無闇に癪に觸つて來た。

『あんな女が何だ。惚れてやらねえぞ。もう、あのホールへは絶對に行かん』

大谷君は決心した。特急先生だから、惚れるのも早いし、決心するのも早い。

ところがその晩、先生は夢を見た。

『貴方。火事――です。大變です、わよ』

ゆつくり〳〵云つて、先生を揺り起してゐる女がある。見ると、靜子が何時の間にか女房になつて、先生に火事を告げてゐるのだ。火事だといふのに、隨分ゆつくり物を云ふ奴だなアと思つたら、眼が覺めた。

何しろ、絶交を決心したその晩に夢を見る程だから、大谷君は、やつぱり彼女を忘れることが出來なかつた。男の友達の秋山君とは、絶交してから一度も會はない癖に、大谷君は、彼女とは會はないでゐられなかつた。

それ以來、前にも增して頻繁に大谷君はFホールへ通ふ樣になつた。正に、ホール特急である。だが依然として彼女には手應へがなかつた。切符は隨分彈むのだけど、彼女は別に嬉しい顏を見せなかつた。映畫に誘つても食事に誘つても、一度も首を縱に振らなかつた。

かうなると益〻焦るのが、戀の道である。大谷君は、もう小說を書くどころの騷ぎではなくなつた。

五

『君は今晩、とても綺麗だね』

大谷君は御滿悅さうに、靜子孃を見た。Sビルの地下室の喫茶店である。二人は此處で落合つたのだ。

『さう？　だつてあたし、嬉しいんですもの』

彼女はニツと笑つた。全く、心から嬉しさうだつた。二人はこれから最初のランデブウに出かけるところなのだ。あゝ大谷君は、何時の間に彼女の心を摑んだのだらうか。特急だけあつて、油斷が出來ない。

『僕も嬉しいよ。これで本望を達した』

特急先生はさも旨まさうに、熱い珈琲を啜つた。

『あのウ、あたしお願ひがあるんだけど――』

卓上にあつたカメラ雜誌を取り上げながら、彼女は例によつて拵へ目に切り出した。

『お願ひ？　云つて御覽』

大谷君は融ける様な目で彼女を見た。女の子に甘えられたのは、先生初めてである。

『ねえ、これから酒場へ連れて行つて下さらない？　あたし今晩、お酒が飲みたいのよ』

『えツ、君がお酒を飲みたい？　醉はせた上で聞きたいことがあるつて筋か。有難い』

大谷君、思はず珈琲を零してしまつた。彼はこのところ、すつと小説が書けないで、従つて金が入らない。其處へ持つて來て、彼女への切符や何やらで大分無理してゐるので、軍資金は乏しいのだが、そこは、街に馴染の深い先生だから、顏で飲める酒場が方々にある。先生は、酒も飲まないうちから、もう醉つた様な氣持になつた。

『あら。變だわ』

カメラ雜誌のグラビヤをめくつてゐた彼女が、突然叫んだ。

『怎うしたの？』

『これ見て御覽なさい』

彼女は開けたまゝの雜誌を差し出した。それは一頁大の寫眞だつた。ダゲール百年記念懸賞寫眞、特選作品とあつて、題は『銃後』だつた。

『おや、君が寫つてるぢやないか』

大谷君は意外さうにその寫眞を眺めてゐたが『アツ、秋山だ。秋山が當選した』

と聲を彈ませた。

『誰アれ、秋山つて？』

彼女は覗き込んだ。

『僕の友達さ。驢馬公だ。君知つてるの？』

『知らないわ。驢馬なんて』

『知らない奴に寫眞を撮られたのか』

『だつて、此處はO町の驛の前よ。この夏、あたし叔母さんの別莊に行つてゐたの。其處の別莊番の息子さんが出征したのよ。その時驛まで見送りに行つた時の寫眞だわ。知らないうちに誰か撮つたのね』

『さう云へば、秋山もO町へ行つたと云つてた。彼奴、海の寫眞は撮らなかつたなんて云つてたが、こんな素晴らしいのを撮つてたんだな』

大谷君は嬉しかつた。驢馬とか意氣地なしとか惡口を云つたのも、彼の才能を伸ばしたいからこそだつた。それが妙にこじれて、いゝ、あれから一度も會はないが、このカメラ雜誌は寫眞界でも最高の權威だし、ダゲール百年記念懸賞と云へば、月例懸賞とは違つて、それこそ檜舞臺だ。

『秋山も、これで一流のカメラ・マンになつた』

大谷君は滿足さうに呟いた。

『あたし、こんなに大きく出されて、何だか晴れがましいわ』

靜子嬢はダンサーの身を恥ぢる樣に、頰を染めた。

『君に、別莊持ちの叔母さんがあるなんて、知らなかつた』

大谷君は、この貧しげな娘を繁々と見詰めた。

『あたしは、小さい時は家はよかつたのよ。でも兩親が死んで、叔父の世話になつてゐましたの。叔父が生きてゐたうちは、よくして呉れましたけど、二三年前に叔父が死んでからはガラリと變つて、てんで、あたしなんか親類扱ひをしてくれない叔母よ。それが、夏だけは、話相手が欲しいと見えて、あたしを海の別莊に呼んでくれますの。だから、夏だけの令嬢だわ』

彼女は寂しく笑つた。

『さうか。道理で上品なところがあると思つた。かうやつて寫つてゐるところを見ると、何うしてもダンサーとは見えないからね。銃後を護る健氣な大和撫子だ。僕は君みたいな戀人を持つことを光榮に思ふよ』

大谷君は飽かず寫眞を眺めてゐたが、『それぢや、そろそろ出掛けようか。今晩は愉快だ』と上機嫌で立ち上つた。

六

二人は店を出ると、直ぐ圓タクを拾つた。先づ、本牧のキヤバレイで飮まうといふ大谷君の心算だつた。特急先生だから、遠走りをしたがる。

車を駛らせてゐるうちに、大谷君は急に秋山君に會ひたくなつた。雲泥莊は大森だから、本牧へ行く途中だ。一寸雲泥莊に寄つて秋山君を呼ばうと考へた。さうすれば靜子にあの『銃後』の撮影者を紹介することが出來るし、知らないで他人の戀人を撮つた秋山の吃驚した顏も見ることが出來る。それに雲泥莊へ行けば本や原稿があるから、自分は質屋でないことを彼女に證明することも出來る。大谷君は愈〻雲泥莊へ寄る決心をした。

大谷君の胸には、ふと、自分が文壇に初陣した時のことが浮かんで來た。それは矢張り懸賞當選だつた。それを知つた秋山は、飛んで來て祝杯を擧げてくれたつけ。不遇時代、一番親切にしてくれたのも秋山だつた。それを自分は驢馬と罵つたのだ。しかも、その驢馬は今は輝かしい榮冠を獲、罵つた自分は小說が書けないでゐる。大谷君はハンカチで眼を拭いた。

『あら。どうなすつたの？』

靜子が怪しんだ。

『いや、餘り幸福なんで、涙が出たんだ』

大谷君は潤んだ眼で笑つた。

『あ、一寸此處で停めてくれないか』

大谷君は運轉手に命じた。雲泥莊の前だ。

『あら、まだ大森よ』

彼女は怪訝な顏をした。

『いやね、君にあの寫眞の撮影者を紹介しようと思ふんだ。こゝは僕の仕事場だから、御心配なく――』

大谷君は車を降りた。

『まア、先生、暫らく――。さア、さア、どうぞ』

女將が愛想よく出迎へた。大谷君は意外な氣がした。實は部屋代が大分溜つてゐるので、厭味を云はれるんぢやないかと思つて來たのだ。

『先生、この間は、どうも有難うございました』

女將は重ねて頭を下げた。

『え、何が――？』

『あの、秋山さんが、先生から賴まれたと仰有つて、態ふ部屋代を持つて來て下すつて――』

『部屋代――？』

大谷君が唖然としたところへ、

『貴方、先生なの？　質屋さんぢやないの？』

と靜子孃が摺り寄つて來た。

『はゝゝ。今、眞物の質屋が來るよ』

大谷君は女將に、秋山君を呼びにやる樣に賴んで、靜子孃を部屋へ案內した。

『貴方、小說家なのね』

彼女は部屋の裡の本や原稿紙を見て云つた。

『お氣の毒ながら君の人相學は當たらなかつた。僕は怎ういふ別名で小說を書いてるんだ』

大谷君は書架から自分の小說集を出して、彼女に示した。

『あら。この名前なら、あたし知つてるわ』

彼女は尊敬の眼で大谷君を見上げた。大谷君は占めたと思つた。

『面白さうな本ね。讀ましてね』

彼女は椅子にかけて、小説集を繙きはじめた。

『やあ――』

その時秋山君が入つて來た。思ひがけなく女が居たので、秋山君は眼を逸らして眞赤になつた。驢馬だけあつて、最初から女を正面に見る勇氣はないのである。

『秋山君。君は僕の部屋代を――』

大谷君は立ち上つて迎へた。

『いや、あれはね。君が餘り來ないから、女將に聞いたんだ。そしたら、部屋代が少し溜つてると聞いたもんだから、それで君が來難いんぢやないかと思つて、拂つて置いたのさ。君はこの部屋でないと仕事が出來ない男だからね――』

秋山君は笑つた。

『濟まない。あんなに愛想盡かしを云つた僕に對して、そんなに心配してゐてくれたのか』

大谷君は思はず秋山君の手を握つたが、

『あ、お祝ひを云ふのを忘れてた。君が到頭、日本のダゲールになつたなア』

『あゝダゲール記念の懸賞寫眞か。實は、それについて――』

と秋山君が云ひかけた時だつた。

『貴方は、あの――』

と靜子孃が、本を伏せて立ち上つた。

『アッ』

初めて彼女と眼を合はせた秋山君は、棒の様に立ち竦んだ。彼女は何と、O町の海で逢つた別莊の令孃、卽ち傑作『銃後』のモデルではないか。

『君達は知つてるのかい？』

大谷君はキョトンとした。

『君は、この方と――？』

秋山君も同じ樣なことを云つてゐる。

『これは君、僕の戀――』

と大變君が云ひかけた時、彼女は傍から、

『大谷さんは、あたしのお客さんなのよ』

と披露した。戀人とお客とでは、大分開きがある。

『お客さん――？』

秋山君は暫に落ちない顏だ。

『ほゝゝ。夏はあたし、別荘に居りましたわね。でも、本當はあたし、ダンサーなんですの』

靜子嬢少しも悪びれない。

こゝでお互ひの素性が分明する様な會話が取り交はされ、『銃後』の傑作が生れた經緯も分つた。

『あたし、貴方は確かに藝術家だと信じてをりましたわ』

彼女は赤くなつて笑つた。

『僕も貴女を、ダンサーだとは思はなかつたです』

秋山君は微笑を返した。

『ほゝゝゝ。實はあたし、ダンサーを賴めようと思つてますの。すうつと音信不通だつた兄が、最近ホノルルから突然歸つて來まして、一寸纏つた金をあたしに呉れたんですのよ。その金であたし、酒場でも開かうかと思つてゐましたもんですから、さういふ方なら酒場へもいらつしやるだらうと思つて——。貴方の爲に特別席を作つて、毎晩花を飾つてお待ちしようと思つてましたのよ。それで實は今晩、この大谷さんと一緒に酒場を見學しようと、出て來ましたの』

『何だ。さういふ魂膽があつたのか。それで今晩に限つて、あんなに機嫌がよかつたんだね。どうも、變だと思つた』

大谷君は悄氣た。

『大谷君。君が小説を書けなかつた理由が分つたよ。君は戀してたんだね』

秋山君は大谷君の肩に手を置いた。

『許してくれ。知らなかつたもんだから、他人の戀人にちよつかいを出して、濟まなかつた。改めて君達の幸福を祈るよ。君は懸賞の金が入つたらうし、この女も兄さんから金を貰つたのだから、今こそ結婚して獨立すべきだね。僕は、車を待たしてあるから、これで失敬する。君達はゆつくり此室で、結婚の設計を立て給へ』

大谷君はその儘出て行かうとした。

『ちよつと、待つてくれ』

秋山君は愕てゝ引き止めて、『僕は結婚どころか、戰地に行かなければならないんだ』

『え？　召集令が來たのか』

『さうぢやないんだ。あの「銃後」のスナップが認められて、〇〇新聞から特派寫眞員になれと云つて來たんだよ。以前、寫眞隨筆などを書いたことがあつて、まんざら〇〇新聞とは緣がなくはなかつたけど、こんな交渉が出來るとは思はなかつた。四五日中に出發するんだ』

『まア――。折角お逢ひ出來たと思つたら――』

彼女は涙聲だつた。

『僕も君と別れるのは悲しい。僕には、君の樣な友人が絶對に必要なんだ。君や靜子さんの樣な落ち付いたおつとりした人と交際はないと、僕は仕事が出來ないことが初めて分つたよ』

大谷君が寂しく笑つた。

『靜子さん。お聽きの通りです。僕の代りになつて大谷君を慰めて下さい。そして、うんと仕事をさせて下さい』

秋山君は云つた。

『えゝ。でも、あたしの戀人は貴方一人――』

『それは分つてます。しかし、いゝ戀人は同時に、いゝ友人でなければ。――僕の友人は、貴女にとつても友人でせう』

秋山君は彼女の顏を覗いた。彼女は默つて、力なく頷いた。

『貴女は「鐵後」のモデルだ。確乎して下さい』

秋山君は彼女の手を執つて、强く振つた。

七

いよ〳〵秋山君が出發する日が來た。驢馬が特急に早代りして戰地に行くのだ。

品川驛には靜子孃と大谷君、それから新聞社關係の人々の中に交つて、もう帝大に歸つて來てゐる頭蓋骨博士も送りに來てゐた。

『おい。僕の人相學と骨相學は適中したらう。寫眞班の特派員と云へば、藝術の兵隊さんだからね』

頭蓋骨博士は相變らず暢氣なことを云つてゐる。

『それではお氣をつけて――』

靜子孃は涙を見せまいと努力してゐるけど、さすがに聲は消え入りさうだつた。

『僕は昨夜眠れなかつた』

大谷君も靑い顏をしてゐる。

『戰地へ行つたら素晴らしい寫眞を撮るから、君も元氣で、傑作を書いてくれ給へ』

送られる秋山君の方が、あべこべに大谷君を慰めなければならなかつた。これでは全く、驢馬が特急で、特急が驢馬である。

明眸交叉點

『秋山、戰死するなら、行儀よく死ねよ。いゝ化石になる樣にな』

頭蓋骨博士が人類學者らしい忠告をした。

『化石だつて？　それは何萬年も後のことぢやないか。君の手で採掘は出來まい』

秋山君は思はず笑つた。

『だから俗物は駄目だつて云ふんだ。學者は遠い將來のことを考へとる。國家だつて同じだらう。將來の平和を考へるからこそ戰爭もするんだらう。さうぢやないか』

頭蓋骨博士は汽車の窓にしがみ付いて議論をし出した。

『さうだ。國家や人類の命に較べれば、個人の命なんか何でもないね』

秋山君は感心した。

『なるほど、何萬年先のことを考へれば、失戀や別れなんか夢みたいなもんだなア』

今迄悄氣てゐた大谷君が、初めて朗かに笑つた。

『さうですとも。頭蓋骨は失戀をしませんからねえ』

頭蓋骨博士は大眞面目で云つたが、秋山君は思はず吹き出した。彼は窓から乘り出して、

『ハヽヽ。自分のことを云つてやがる。靜子さん。この男の綽名は頭蓋骨といふんですよ』

これには皆、ドツと笑つた。秋山君の汽車は、この陽氣な哄笑の裡から徐々に動き出した。

聟殿とその弟

『ハヽヽ、愉快だな。如何にも、兄さんらしいですね』

『おい、人が癪つてるのに笑ふ奴があるか。同情しろよ』

馬宮君と弟の欽也君が、何か揉めてゐる。ここは馬宮眼科醫院の應接間だ。

馬宮君は當醫院の主人公だけど、本尊の眼科醫は、彼ぢやなくて彼の奥さんである。つまり馬宮君は、女醫さんの入聟だ。

『同情どころか、僕は寧ろ羨しいですね。兄さんが新聞屋に玄關番と間違へられたといふのは、兄さんが若い證據ですよ。兄さんは全く、紅顏の美少年だからな』

『馬鹿にするない』

これが馬宮君の口癖だ。以つて、如何に彼が普段、女醫なる奥さんに馬鹿にされてゐるか判る。奥さんなら、まだ忍べる。今日は新聞の觀誘員に、『へん、玄關番の癖に』と馬鹿にされたのだから、御氣嫌斜めなのも無理はない。

『僕は、兄さんを馬鹿にしませんよ』

欽也君は眞顏になつて『だけど、一遍でいゝから兄さんを童話劇に出したいな。兄さんは童話劇俳優の素質がありますね』

欽也君は小學校の先生で、同時に童話劇協會『チヤルメラ倶樂部』の同人だ。チヤルメラ倶樂部は、地味だけど堅實な童話劇團として、都下の識者から囑望されてゐる。

『馬鹿にしないといふ口の下から、ホラ、その通り馬鹿にしてるぢやないか。この年になつて童話劇に出られるかい！』

『誤解しないで下さいよ。童話劇と云つても、今ぢや立派な獨立した演劇ですからね。俳優も必ずしも子供に限るわけぢやないです。そもそも〳〵臺本からして――』

欽也君は勃氣になつて述べ立てようとした。

『もう、いゝよ。その話は分つた』

馬宮君は手を振つて『それよりも、お前もソロ〳〵結婚したら何うだ。來年三十だらう』

『えゝ、考へてますがね。僕は兄さんみたいに艶福家ぢやありませんからね。僕なんか、惡事災難女避け、四角四面の盤臺面ですから――』

欽也君は兄貴に花を持たした。たしかに賢弟の素質がある。

『全く――。お前と僕みたいに、似ない兄弟つて珍らしいなア』

馬宮君は相好を崩した。煽てられると直く御横嬢が直るところなど、何處までも、お坊ちやんだ。

しかし馬宮君が艶福家であることには、間違ひはない。彼は、苟も女醫さんに見染められたのだ。その當時、奥さんの杉子さんは、まだ自分で開業しないで、或る大きな眼科病院に勤めてゐた。眼を惡くしてその病院へ行つた彼を診察したのが、たま〳〵杉子さんだつたのだ。

『あら。貴方、撮影所の方ねえ』

杉子さんが最初に云つた言葉は恁うだつた。

『ぼ、僕を御存知ですか』

馬宮君の心臟はドキンとした。

『この間、あたし達撮影所を見物しましたのよ。そしたら貴方が、ホラ、春山大樹さんを大きな團扇で煽いでゐらしたでせう。とても印象に殘りましたわ』

杉子さんは笑つた。

『何しろ彼處は暑いんで、それで先生を團扇で煽ぐんです。それに光線が强烈ですから、僕みたいな者でも、つい、スター並に眼を患ふです』

馬宮君は赤くなつた。彼は當時、名優春山大樹の弟子で、映畫にはまだ一度も出てゐなかつた。全然無名の見習生だつたから、彼女に認められたのは迚も嬉しかつた。

兎に角、これが二人のロマンスの始まりだつた。恰度、やはり眼科醫だつた父親が死んで、杉子さんがソロ〳〵相續しようとしてゐた時だつたので、二人は急テンポで結婚しちまつた。家作も四五軒あるし、醫療設備萬端、先代のがその儘使へる。それに、町會長をやつてゐた先代の顏が利いて、花聟の馬宮君は早速、町内の青年部長といふ肩書を頂いた。豈、艶福と云はざるべけんやである。

『しかし兄さん。僕は、結婚するなら餘り威張らない女と結婚したいですね』

欽也君は、暗に女房天下の兄貴を諷した心算だつた。しかし然麼ことが判る兄貴ぢやない。

『さう云へばお前、さつき素敵に眼の美しいお嬢さんが治療室へ入つて行つたぜ。氣になるから診察簿を見たら、梶原禮子とあつた。不思議だなア、だけど――』

馬宮君は首を捻つた。

『何が不思議なんです？』

『あんなに美しい眼をしてながら、眼科醫に來るなんて不思議ぢやないか』

『厭に他處のお嬢さんのことを心配してますね。だから兄さんは、氣が若いつて云ふんですよ』

『いや、お前のお嫁さんに世話しようと思つたからさ』

兄貴はドギマギして狼狽した。
その時玄關で、男の聲がした。
『今日は――』
『あ、又拙賣かな。よし追拂つてやらう』
馬宮君は颯爽と立ち上つた。

ボロ服を着た交叉點

『イヨウ、吉川君ぢやないか』
玄關へ出るや否や舊姓を呼ばれたので、馬宮君は面喰つた。相手は、身裝卑しき紳士である。全然見憶えがない。
『誰方ですか、一體――』
『あれ、忘れたのか。矢場だよ。ほら、慶應で一緒のクラスだつた――』
『慶應か。慶應なら駄目だ』
馬宮君は匙を投げた。彼は慶應にはタツタ二學期しか在學しなかつたから、その當時の友達は

てんで覺えてゐない。
由來、馬宮君は脫線の名人である。初め慶應の法科に入つたが、二學期だけで明大の商科に つた。ここで二年間、同じクラスで粘つた。早く云へば落第したのだ。同じクラスを二年間やつたので倦きて、大正大學の文科に轉じた。ここでマゴ〳〵してゐること約一年、又もや脫線して映畫俳優泰山大樹の弟子となつたのだ。だから結局、どの學校でも終點まで行かなかつた。
專攻は法科、商科、文科の廣きに涉り、大學は慶應、明治、大正の三代の長きに及んだけど、惜むらくは昭和大學といふのがなかつたから、彼が學士樣になれなかつたのも昭和ない。
『僕を忘れるてえのは酷いな。試驗の時は何時も、僕のノートを借りに來たぢやないか』
矢場君は頗る不滿さうに、口をパク〳〵さした。
『しや、成程々々――』
と馬宮君は誤魔化して『眼の治療ですか』
『イヤ、貸家札を見て來たんだけどネ、貸して貰へるかしら?』
矢場君は自分のボロ洋服にチラリと目を落した。
『あ、貸家の件か。昔の友達に入つて貰へば結構だから、お貸ししませう』
さすがは古い友達は懷しい。チヨツト話し合つてる中に馬宮君の頭にも、矢場君の記憶が甦

つて來た。パク〳〵と金魚の樣に口を開閉して物を云ふのが、矢場君の昔からの癖だつた。

『それは有難い。でも、大將に訊かなくても大丈夫かい？』

『大將？』

『ここの旦那さ』

『君々。僕が旦那だよ』

『へえ——。これは失禮した。玄關番ぢやなかつたのか』

あはれ舊友の目も新聞屋の目も、同じだつたのか。

『馬鹿にするなよ』

馬宮君はつい口癖が出た。『かう見えても、僕は青年部長だ。僕こそ君を押賣かと思つたぜ』

『冗談ぢやない。僕は——』

矢場君は慌てゝ名刺を差し出した。見ると、新生バンドと刷つてある。

『何だ。やつぱり行商人ぢやないか』

馬宮君は笑つて、『帶革なんど賣つて歩いても、大して儲かるまい』

『そ、そのバンドぢやないよ。管絃樂團の樂團だ』

矢場君は敦圃いて訂正した。

『まア、いゝや。兎に角、上り給へ』

馬宮君は矢場君を應接間に通した。

『いやア、これは！』

『あ、珍らしい所で——』

同時に叫んだのは、矢場君と欽也君だつた。

『あれ、君達は知つてるのか』

馬宮君は呆れ顏で、舊友と弟の顏を見較べた。

『兄さんこそ、矢場さんを御存知なんですか。僕は兒童劇で、時々矢場さんのバンドに出演を賴みますから——』

欽也君は說明した。

『なるほど。古川君と古川君——、君達は兄弟だつたのか』

矢場君は初めて納得した顏をした。

『僕は古川ぢやないよ。今は馬宮讓だ』

馬宮君は改めて名乘つた。

『聟養子だね。結構だよ』

矢場君は笑つて『しかし君達兄弟は似てないね。兄貴は肥つて弟は痩せてるし、兄貴は呑氣で弟は几帳面だ。古川欽也君の几帳面は有名だからね』

『うん。今も話してゐるところさ。僕達は顏も似てないし性質も似てない、共通點が一つもないんだ。永久の平行線だね』

馬宮君は、追がに艶福の問題は持ち出さなかつた。兄らしい思ひやりである。

『兄さん。共通點がありましたよ。矢場さんは僕と兄さんの共通の友達でせう。つまり矢場さんは、僕達兄弟を結ぶ交叉點ですね』

欽也君は嬉しさうに云つた。親子でも兄弟でも、交叉點のない永久の平行線なんて、寂しい限りだ。お互ひの間に交叉點を發見することは、人生の喜びである。

『おゝ、われ等の交叉點、光榮ある「新生バンド」の大將——握手しよう！』

馬宮君はいきなり矢場君の手を握つた。

喜ぶにしても、この通り、弟は地味で兄貴は派手である。

『僕が君達の交叉點だつたり、おまけに此家の店子になつたりするのも、何かの緣だらうなア』

ボロ服を着た交叉點は、例によつて口をパク〳〵さした。

賢弟の大計畫

『梶原禮子なる令孃は綺麗な人だね』

『典型的な明眸ね。あの方が治療室へ入つて來ると、まるで花が咲いた樣な感じだわ』

馬宮君夫妻が、居間でお茶を飮んでゐる。

『先から僕の疑問だつたけど、あんなに眼が美しい癖に、どうして眼科醫に來るだらう』

『貴方、そんなことが分らないの？　眼の美しい人ほど、眼を大事にするものよ』

『なるほど。金持が金を大事にすると同じだな。それで彼女は、時々思ひ出した樣にやつて來て眼を診て貰ふんだね。いや、なるほど』

『いやに感心してるのね。そんなにあのお孃さんのことが氣になるの？』

杉子夫人の眼はキラリと光つた。

『ぼ、僕の弟のお嫁さんを探してるんだ。あの令孃なら理想的だと思ふんだけど——』

『およしなさいよ』

杉子夫人は吹き出して『あのお孃さんは貴方、音樂學校教授の令孃よ。欽也さんなんかには、

とても屆かぬ高嶺の花だわ』

『さう云つたもんでもないさ。僕だつて――』

云ひかけて馬宮君は口を噤んだ。（僕だつて無名の俳優見習の時に、女醫さんのお前と戀をしたぢやないか）と云ひたかつたのだけど、やめた。

思へば、あの頃は幸福だつた。しかし今は馬宮君、幸福どころぢやないのだ。一々奥さんに文句を云はれ、輕蔑され、最近では全く、玄關番待遇である。

やはり結婚は、身分相應の相手がいゝのかなア――。そんな佗しい感慨に耽りながら、馬宮君は冷たくなつた番茶を啜つた。

『それはさうと貴方、矢場さんは何うするの？』

杉子夫人は話題を轉換した。

『何うするつて？』

『越して來てから、まだ一度も家賃を入れないぢやないの。これで三月よ。貴方――』

『うん。何しろ彼奴も困つてるからなア』

『困るのは此方よ。みんな貴方の責任よ。勝手にあんなルンペンを入れるんですもの』

『ルンペン？　馬鹿にするない』

馬宮君はムツとして、悲しき口癖が出た。光榮ある兄弟の交叉點を侮辱されたのだから、無理もない。

『矢場はルンペンぢやないよ。金はないけど、遊んでるんぢやない。立派に仕事をしてゐる。あゐふ男はボヘミヤンと云ふんだ。ルンペン扱ひは怪しからんよ』

馬宮君は珍らしく、いきり立つた。その時看護婦が入つて來た。

『あの、患者さんが見えましたけど――』

『さう』

さすがは商賣が大事、奥さんは喧嘩を諦めて治療室へ、そして馬宮君は矢場君の借家へ――。

夫婦相爭つた後は、矢場君の寓居を訪れることに馬宮君は決めてゐる。いはゞ、心の憂さの捨て所だ。飛んだ交叉點である。

『また來たよ』

馬宮君はノツソリと矢場君の家に現れた。矢場君には奥さんがない。その代り、樂園の若い連中が、何時も二三人ゴロ〳〵してゐる。

『また夫婦喧嘩か』

獨身者の矢場君は、面白さうに迎へた。

『どうも毎度のことでね。女房の居ない家つて、氣が樂でいゝな』

馬宮君は如何にも氣樂さうに坐つた。

『やア、やつぱり此處でしたね、兄さん』

馬宮君に一足遲れて欽也君がやつて來た。學校の歸りだ。彼はアパート住ひだから、學校の歸りにはよく此處へ寄つて、油を賣つて行く。

『なるほど欽は君達の交叉點だね。兄と弟が、僕の家で仲睦しく交叉する』

さう云ふ矢場君も愉快さうだ。三人は聲を揃へて笑つた。馬宮君は先刻までの憂鬱は一遍にフツ飛んでしまつた。

『矢場さん。變つた八百屋が來ましたよ』

臺所から同宿、音樂青年が顏を出した。『小學生の三人連れで、とても安いですよ』

『あ、それは勤勞奉仕の八百屋だ。僕が世話方だ。町內の高等科の生徒を動員して、純益は獻納するんだ。買つてやり給へ』

馬宮君は青年部長の威嚴を示して、矢場君に命令した。

『ところが金がないんでね。勤勞奉仕の八百屋さんぢや、月末拂ひといふ譯には行かんのだらう』

『うん。原則として現金制度なんだがね、君のことだから特別に取り計らふよ。僕が後で拂つて置かう』

馬宮君は臺所係の青年を振り返つて『僕の名前を云つて、何でもお好きなものを取つて下さい』

『有難いですね。序に、肉屋と米屋の勘定をお願ひしたいですな。この頃は何店の御用聞も寄りつかんです』

青年はホクホクして臺所へ引き退つた。

『虫のいゝことを云つてやがる。家賃も拂はん癖に――』

矢場君は恐縮した。

『兄さん。その勤勞奉仕はしかし、八百屋の生業を脅しませんか』

欽也君が首を傾げながら云つた。

『八百屋の――？　あ、それは氣が付かなかつた』

馬馬宮はハツとした顏だ。

『純益を獻納するその趣旨は結構ですけど、小學生の御用聞ぢや可愛いから、皆そつちから買ふでせう。すると町內の、本職の八百屋が生活に困りますね』

『なるほど、欽也君は小學校の先生だけに、思慮が周到だね』

矢場君は感心した。

『いや勤勞奉仕は難しいですよ。餘程前後を考へてやらないと――』

欽也君は前後左右を見廻してゐたが、彼の眼に、壁にかけたクラリネットが映つた。

『兄さん。素晴らしい計畫が浮かびましたよ。皆で一つ、勤勞奉仕をやりませんか』

欽也君はポンと膝を叩いた。

散々なり青年部長

『讓さん。ちよいと――』

例によつてブラリと出ようとした馬宮君、杉子夫人に呼び止められた。

『いけねえ』

馬宮君は足が竦んだ。『讓さん』と呼ばれる時は、碌なことがない。

元來、昔からこの名前は馬宮には苦手である、小學校の三年生頃のことだ。當時の讓ちやん、卽ち馬宮君が、家の塀へ『讓ノ家、讓ノ家』と落書したものである。すると、世間には悼て者が

居るもんで『お宅はお讓りになるのですか。價格はお幾ら位で――？』と家を買ひに來た男があつた。『讓ノ家』を『讓り家』と讀み違へたのだらうが、兎に角、その頃から既に馬宮君は脫線の素質を閃めかしてゐたとも云へる。その時はウンと親爺さんにお目玉を頂戴したが、結婚してからも、どうもこの名前が祟る。杉子夫人は、風雲急なる時に限つて『讓さん』と呼ぶ。旦那樣に一步を讓らせる魂膽かも知れない。

『貴方。この小切手、どうなすつたの？』

杉子夫人は右手に紙切をヒラ〳〵さしてゐる。

『あ、それはね、矢場君が持つて來たんだ。演奏料に貰つたのだけど、先附の横線小切手だから現金に換へて呉れつて――』

『それで貴方、金に換へて上げたの？』

『あゝ。家は銀行の口座があるから、早速承知したよ』

『早速承知？　呆れた方ねえ。どうして、家賃としてお取りにならなかつたの？』

『そんな阿漕なことが出來るもんか。彼方は食ふに困つてるんだぜ』

『それはさうとして、小切手は四十九圓なのに？　生金は五十圓出てますわね』

今度は杉子夫人會計簿を持ち出した。

『四十九圓ぢや、始終食へんで語呂が悪いだらう。だから五十圓やつたのさ。たつた一圓の違ひだ』

馬宮君は最初、矢場君に『一圓の釣りはあるか』と訊ねた。すると、無いと云ふのだ。あゝ、この男は一圓も持つてないのだ——さう思ふと可哀想になつたので、十圓札を五枚やつたのだ。

『有難い。この一圓は百萬圓の値打がある』さう云つて矢場君は泣いた。

『まア、家賃も取らないで、その上に一圓おまけを附けてやるなんて、貴方は何て情ない人でせう。この調子ぢや、折角お父様が遺して下すつた家作は滅茶苦茶ですわ』

杉子さんはいきなり泣き出した。同じ一圓で先刻は矢場君が泣き、今又杉子夫人が泣く。さぞ水ツぽく、涙ツぽき一圓だつたらう。

しかし、男の涙は感激の發露だけど、女の涙は大體、ヒステリーの前驅だ。果して杉子夫人は八ツ當りを始めた。

『貴方。八百屋の勤勞奉仕は何うしたの？』

『あれは中止したよ』

『だらしがない！　やりかけて中止するなんて、それで青年部長ですか』

一番痛いところを衝かれたので、馬宮君は青くなつた。お得意の『馬鹿にするない』も出な

い。

『それから貴方。治療室へ來てキヨロキヨロするのも止して頂戴！』

『別に、キヨロ〳〵なんかしないよ』

『するぢやありませんか。それも綺麗な患者さんが來てる時に限つてるんですもの。梶原禮子さんが笑つてたぢやありませんか』

『あ、あれは、君が僕に劍突を喰はせたからだよ。お蔭で面目を潰しちやつた』

『あら。あの人の前で叱られると面目が潰れるの？　變な面目ねえ』

女醫さんの眉はキリ〳〵と昂つた。『貴方なんか玄關番ぢやありませんか』

應よ。玄關番？　云つたな』

『玄關番？　云つたな』

馬宮君は詰め寄つた。日頃から暗に玄關番の待遇は受けてゐるけど、かうハツキリ、面と向つて云はれたのはこれが初めてゝある。

『云ひますとも。玄關に頑張つてれば梶原禮子嬢の顏が拜めていゝでせう』

あゝ、ボロ服の藝術家矢場君は馬宮君達の兄弟愛の交叉點だつたけど、明眸の麗人梶原禮子嬢はあはれ夫婦喧嘩の交叉點となつたらしい。交叉點にも色々あるものだ。

居候の寢言

馬宮君は、矢場君の家の居候になつた。

大家さんが借家人の所へ轉がり込んで來たのだ。脫線家の面目躍如たるものがある。

『年甲斐もなく、見當違ひな燒餅を燒きやがつて——。僕はもう、あんな家へは歸らんよ。いくら僕が氣が若くつたつて、今更他家のお孃さんに惚れるなんて、そんな馬鹿な、ねえ君——』

馬宮君は矢場君をつかまへて鬱憤を晴らしてゐる。

『うん。君は矢張り奥さんに惚れてる樣だな。昨夜、寢言を云つてたぜ』

矢場君はニヤ〳〵した。

『な、何て云つたッ』

『かう云つてたよ。「遠い遠いわが家。されど其處に愛妻あり」つて——。直く近くにわが家がある癖に「遠い遠い——」なんて、愛妻に惚れてる證據だよ』

獨身の矢場君は昂奮したと見えて、口をパクパクさした。

『そんなことを云つたのかな』

馬宮君は眞赤になつて『だけどその文句は、僕等の歡送歌の文句に似てるぢやないか』

『さうだ。さう云へば似てるね』

二人の眼は急に活々と輝いた。

矢場君の主宰する新生バンドは、町内の出征兵士の歡送行進に、勤勞奉仕として演奏參加をしてゐるのだ。青年部長の馬宮君はマネージア格で先頭に立ち、それから樂隊、そして青年團員がその後に續く。

この勤勞奉仕の發案者は賢弟欽也君である。歡送歌も彼の作詞にかかる。

あゝ遠く　はるかなる大陸
されど其處に　戰場あり
戰場は吾を待つ　いざ行かん

あゝ遠く　今ぞわれ門出す
さらば友よ　ますらをの
譽をば大陸に　いざ樹てん

かう云つた文句で始まる。ちよつと變つた格調の歌詞たが、作曲によく調和して、極く自然に歌へるのだ。作曲は矢場君がやつた。

矢場君は作曲もやるし、本來、第一ヴアイオリンだが、歡送演奏にはドラムを承つてゐる。この歡送曲は町中を熱狂させた。たしかに新生バンドの新生音樂といふ感じがある。

『歡送歌と云へば、あの作譜は素晴らしいね。君にあんな天才があるとは思はなかつた』

馬宮君は嬉しい時の癖で、少年の樣に頰を江潮させて云つた。

『いや、僕は天才ぢやなくて、つまり祖國に對する熱情だよ。古來名曲の生れたのは、皆、國家大事の最中だからね。英國の國歌は、ボルトベトロの陷落一周年祝賀會の席上で初めて演奏されたし、獨逸の「ラインの守り」は普佛戰爭の產物だ。それから、波蘭土を救はうとした情熱が、ショパンのピアノ曲となつたんだ。かういふ非常時に、新しい音樂が生れるのは當り前だ』

ボロ服の藝術家は謙遜した。

『同感々々。兄さん、僕の作詞だつて棄てたもんぢやないでせう』

欽也君がニコ〳〵して入つて來た。

『なアに、お前の作詞なんか――』

蔭では、弟を可愛がつてゐる癖に、馬宮君は面と向ふと何時もかう、欽也君に惡口を云ふ。

『いや馬宮君はね、曲譜よりも歌詞に感心してるんだよ。その證據には、あの歌詞の替歌みたいな寢言を云つたぜ』

その時、同宿の音樂青年が憚てゝ註進して來た。

矢場君は兄貴の秘密を素ツぱ抜いた。

『馬宮さん。奥さんが來ましたよ』

悲鳴を上げた矢場君

『貴方。歸つて下さい』

杉子夫人はペタリと馬宮君の前に坐つた。馬宮先生、目をパチクリさしてゐる。

『新來患者が急に殖えたのよ。それも皆、若い女なの。そして「旦那樣はいらつしやいませんか」つて聞くでせう。まさか「家出中です」とも云へないし、貴方が歸つて下さらないと困りますわ』

『へえ。いくら僕が艷福家でも、それは少し――』

さすがの馬宮君も聊か氣味が悪くなつたらしい。

『それが貴方、變なのよ。「お宅の旦那樣は童話劇の名優ですつてね」だつて——。誰が宣傳したんでせう』

『な、なに。童話劇だつて？』

馬宮君は眼を剝いた。その時、ふゝゝと笑つた奴がある。見ると欽也君だ。

『ヤ、お前だな。何だつてそんな宣傳をしたんだ』

馬宮君は噛みつく樣に呶鳴つた。

『だつて、さうすれば病院が繁昌するでせう。それに第一——』

『やい、やい。お前は僕を一遍でもいゝから童話劇に使ひたいつて云つてたな。本望を達したらう、この野郎！』

『遠ひますよ。僕の本望はね、兄さんと姉さんを仲よしにさせたかつたんです。兄さんが家を逃げ出してるのを、弟の僕が笑つて見てゐられないぢやないですか。だから、チヨイと筋書を書いたんです、姉さんが迎へに來る樣な筋書をね。それに兄さん、宣傳は奇拔なほど效果がありますからね』

『見上げたもんだ。さすがは歡迎歌の作詞者だけある。見事々々』

矢場君が拍手した。

『いやはや、童話劇作者の筋書に躍らされたのだから、こりや全く、童話劇の名優だ』

馬宮君はスツカリ照れて『でもお前が、若い女達に宣傳するなんて不思議だなア』

『なアに、賴んだんですよ。宣傳の方は、梶原禮子孃に一任しました』

『梶原禮子だつて？　お前知つてるのか』

欽也君、ケロリと云つて退けた。

馬宮君は開いた口が塞らない形である。

『今だから白狀しますがね、實は彼女は僕の愛人なんです。彼女の父親なる音樂學校敎授は僕達のチヤルメラ倶樂部の顧問なんで、そんな關係で、その——』

『この野郎、油斷のならねえ奴だ。だが、よくお前みたいな男にあの美人が惚れたな』

艶福家の兄貴が呆れた。

『惚れるよ。僕が彼女だつたら、眞先にこの男に惚れるね。才能はあるし、人情味といひ思慮深いところと云ひ、男の中の男ぢやないか』

矢場君は又、橫合から口をパク〳〵さした。

『欽也さん、有難うございました。あたしは眼科醫の癖に、心の眼が盲目でしたわ。お蔭で目が

開きました。欽也さんは心の眼科醫です』

女醫さんは、負て輕蔑してゐた義弟に恭しくお辭儀をした。

『飛んでもないです』

欽也君は輕く受け流して『さア兄さん、姉さんと一緒にお歸んなさいよ』

『うん。だけど、「これが珍優でございます」なんて、玄關のマキネンにされるのは厭だな』

形勢好轉と見て、馬宮君は柄になく外交術策を弄し出した。

『もう決して、そんなことはしませんわ。來る途中で町會長に會ひましたのよ。町會町はとても貴方を賞めてました。歡迎歌の勤勞奉仕は町內の誇りですつて。馬宮君は日本一の靑年部長ですつて——』

『おや〳〵。大變なことになつたな』

正直無類の馬宮君、大滿悅である。

『えゝ。欽也さんも偉いですけど、貴方にもいゝ所がありますわ。おつとりとして鷹揚で、思ひ遣りがあつて——。あたし今迄、本當にいけない妻でしたわ。御免なさいね』

杉子さんは馬宮君を見詰めながら、しほらしく頭を下げた。微かにウビガンの香料が匂つた。

『うわア、助からん。欽也君、早くこの御兩人を追ひ出さう』

矢場君は憤然と立ち上つた。

『これはいゝ。家賃滯納の借家人が、大家さん夫婦に立退を命じてらア』

欽也君が愉快さうに笑つた。

名花登場

『それぢや又、チヨイ〳〵來て下さい』

矢場君は玄關で馬宮君夫婦を送り出した。

『どうも長々、お世話樣で——』

馬宮君は頭を掻いてお辭儀をした。

『御免下さい』

そこへ目の醒める樣な令孃が入つて來た。

『あ、梶原さん！』

杉子夫人は驚いた。欽也君は矢場君の後に隱れた。

到頭問題の令孃が現れた。汚い玄關が、一瞬花園みたいに明るくなつた。

『父が、矢場さんへこの手紙を――』

禮子嬢は袱紗から手紙を取り出して、矢場君に渡しながらチラリと欽也君と眼を見合せたが、

『先生。御一緒に參りませう。今日も眼を診て頂きますわ』

と杉子女醫先生を誘つた。杉子さんは仕方なく含嬢と肩を並べて出て行つた。

『僕に手紙つて、何だらう』

矢場君は訝かりながら封を切つた。馬宮君も欽也君も頭を寄せた。矢場君は讀み出した。

『小生は省線の驛頭で、時々貴殿達の歡送曲を拜聽しました。小生の心を擊たれたのは、送られる兵士が、見送りの人と一緒にあの歌を謳つてをられる光景です。それから、バスや電車の中で見送り人があの歌を謳ふと、同車の客が自然にそれに和して謳ひ出すあの光景です。これは、今までの歡送歌には見られなかつた感激すべき事實です。

小生はここに、貴殿の樂團に對して、心から尊敬と感謝を捧げるものであります。それについて、このたび日比谷公會堂で催される傷病兵士慰安會に、貴殿の樂團を推薦いたしました――』

『あ、日比谷公會堂！』

矢場君は叫んだ。これこそ本望の檜舞臺だ。

『よかつたね』

欽也君は矢場君の肩を叩いた。

『みんな君達のお蔭だ』

矢場君の聲は慄へた。

『全く欽也の戀人には色々とお世話になるなア。それにお父さんまで僕達に肩を入れてくれるなんて――』

馬宮君は感慨深かさうに云つたが『欽也。お前と僕の交叉點が、も一つ殖えたね』

『交叉點？　一つは矢場さんで、一つは梶原禮子嬢でせう』

欽也君は萬事解りが早い。

『うん。お前の戀愛と僕の戀愛は實に共通してゐる。お互ひに高嶺の花を手折つたんだ。僕の二の舞を演じて女房の尻に敷かれない樣に、結婚したら氣を付ろけよ』

『ふゝゝ。大丈夫ですよ。ちやんと豫防工作を施してあります』

『豫防工作――？』

『眼が惡くもないのに、彼女を馬宮眼科醫院へ通はせたのは、その爲なんです。女房天下の家庭が如何にみつともないかを、見學させる目的だつたんです。でも、目的は完全に達しました。彼女は「女房天下にだけは絶對にならない」つて云ひました』

明眸交叉點

『おい矢場君、今度は僕が助からないや。何うにかしてくれ』

馬宮君は悲鳴をあげた。

『ハヽヽ。それはお門違ひだ。令嬢交叉點に頼めよ。きつと、お手柔かに惱まして下さるよ』

矢場君は相手にしなかつた。ボロ服の交叉點は、今やその任務を、明眸の交叉點嬢に引き渡したらしい。

まごつき街道

一、美粧院の屋根裏

銀座の電車通から、横丁へ少し入ると、直ぐ分つた。瀟洒な二階建で、入口の分厚な摺硝子に、金文字で「プラチナ美粧院」と書いてある。「美粧院」の文字から來る印象は、ちよつと女湯の感じで、初めての美土路八重次は、入るのが照れ臭さかつた。

『他に入口がないんだから、仕方がないや』

彼は思ひ切つて、扉の把手を引いた。すると直ぐ目の前に、パーマネントのセットがあつたのには、美土路八重次スツカリ面喰つちまつた。

ある、ある。まるで須田町食堂の椅子みたいに、すらりとセットが並んでゐるのだ。それが皆滿員で、電氣鏝をかけたり電熱器をかけたりして貰つてゐる。目の前の椅子のお客は、アイロン工作の眞最中だつた。金米糖みたいに電氣鏝の角を生やした女が、『まア、失禮な！』とばかり横目で美土路を睨みつけた。まるでお化けだ。美土路は憮然とした。

『何か御用でございますか』

十七八の少女が美土路の前に現れた。袖の短い白のワンピースに、エプロンをかけてゐる。

『マダムに一寸――』

美土路は名刺を出した。

『どうぞ此方へ――』

少女は扉の外へ出て來た。美土路はまごついた。他に入口はないのに、一體何處へ連れて行くつもりだらう。少女は委細構はず、先に立つて歩き出した。

四五町行くと、銀座特有の狹い路地があつた。其處を入つて、もう一度曲つたら、美粧院プラチナの裏口に出た。

『まるで、御用聞きだな』

汚い女靴や草履の亂雜に入つてゐる下駄箱を眺めながら、美土路八重次は苦笑した。

『こちらでございます』

上の方で聲がしたので、見ると、先刻の少女が物干臺の梯子段を登つてゐた。

『いやはや、これは何うも――』

美土路先生、大まごつきである。まさか物干臺に案内されようとは、思はなかつたのだ。

彼は、この美粧院の宣傳請負人である。月々定つた報酬を貰つて、それでモデルの寫眞を撮つ

たり、宣傳記事を新聞雜誌に賣り込んだり、廣告文案を書いたりしてゐる。今迄マダムと會ふのは、大抵、四谷の私邸か銀座のレストランだつた。美粧院にマダムを訪ねたのは、今日が初めてである。

客の思惑を憚つて、店へ男に來られることはマダムが嫌つてゐたし、美土路も、女ばかりの本城へ單身乘り込むことは、何となく氣が退けた。しかし今日は、そんなことは云つてゐられなかつた。差し迫つて金が必要だつたのだ。

物干臺へ出て、更に狹い階段を四五段降りると、脊をかゞめてやつと入れる樣な入口があつた。入ると、其處はコンクリートの廊下になつてゐる。店の方へ通じてゐるらしい。

『此處でお待ち下さいまし』

少女は廊下の突當りの扉を開けた。

卓子もあるし椅子もあるし、兎に角應接間の恰好はしてゐた。しかし天井は低く窓は暗く、屋根裏といふ感じだつた。

『忙しいんですのよ、今——』

散々待たした擧句、マダムは不機嫌な顏で入つて來た。

『實は、今月分の宣傳費を頂きたいんですがね——』

美土路は、火を點けたばかりの煙草を、グザと灰皿に突込んだ。

『あら。今日は十三日ですわよ。早いぢやありませんか』マダムは椅子にもかけないで『それに美土路さん、先月は、宣傳記事が一つも出ませんでしたわね』

『え？　確かに「ロマン旬報」に出る筈でしたが——』

『出る筈つて仰有つても、實際出てないぢやありませんか。ですから、今月分の宣傳費から、先月のあの分は差し引くことにいたします』

『そ、そりやマダム——』

美足路八重次は青くなつた。

しかし、これは契約だから仕方がない。その月の新聞雜誌に店の宣傳記事が出ない場合は、宣傳費は半減するといふことになつてゐるのだ。普通の廣告よりは、提灯持ちの記事の方が效果が大きいからである。「ロマン旬報」には美土路の友人がゐた。その友人に、よく賴んで置いた筈なのだ。

『彼奴、忘れやがつたんだな。粗忽家だからな——』

美土路は諦めかねた。

『客な賴み方をなさるからよ。せめて烏森ぐらゐは奢りなさいよ』

マダムは鼻で笑つて、そのまゝ出て行つた。美土路は憤慨した。友情を冒瀆された様な氣がしたのだ。それよりも、當てにしてゐた金が貰へなかつたのが、痛かつた。

彼はよろけながら物干臺へ出た。

『まごついた。こんなにまごついたことはない』

彼は例の梯子段を降りて、通りに出た。もう夕方だつた。彼は何時の間にか銀座四丁目から數寄屋橋の方へと歩いてゐた。

『おい、美土路ぢやないか』

後から肩を叩く男があつた。振り返つて見たら、それは千倉萬藏だつた。千倉萬藏は、文士錄に載つてゐない貧乏小說家である。

二、朱に交つて白くなる

二人は、その邊の安洋食屋に入つた。

『君。食前の一杯は何うだ？』

千倉萬藏はゴクリと咽喉を鳴らした。

『生憎、今日は金がないんだ』

美土路八重次は頭を掻いた。二人の間では、何時も彼が金を出す習慣だつた。

『いゝんだよ。聊か持つてる』

千倉は嬉しさうに胸のポケツトを叩いた。

『原稿が賣れたのかい？』

美土路の聲は冴えた。彼は千倉の小說が好きなのだ。

『原稿？　原稿と云へば、原稿だけど――』

千倉は聲を落して「實は、美術辭典の上請の仕事があつてね、その、前借をして來たところさ」

『感心しないね。そんな仕事より、小說一本槍で行つた方がいゝんだがなア』

冴えた美土路の聲が、忽ち曇つた。

『と云つたつて、僕の小說は賣れないからね』

千倉は苦笑して、傍へ來た女にビールを註文した。

千倉は、大學では文科だつた。それが、學校を出ると畑違ひの商事會社に入り、四五年は殊勝に勤めてゐたが、家鄉忘じ難く、小說を書き出した。彼の小說を最初に買つてくれたのは、美土

路だつた。美土路は當時、或る大雜誌の編輯者だつた。その時の千倉の小說は、彼と彼の愛妻の哀しき戀愛を書いたものだつたが、雜誌に載つたのを見ると、ユーモア小說と銘打つてあつた。これには千倉もまごついた。それ以來仕方なしにユーモア作家になつた。割に調子よく書けたし原稿も賣れたが、それが祟つて會社は益々忙しくなつた。會社を罷めれば暇になるし、仕事のためには好都合だと喜んだのも束の間、皮肉なもので、暇になつたら却つて小說が書けなくなつた。書いても賣れなかつた。だからこの二年間、彼は貧乏のしつゞけである。

一方の美土路にも、生活の變化があつた。彼は元來優秀な編輯者で、殊に企畫の天才だつた。彼は到頭雜誌社を飛び出して、自分で十錢雜誌「航空路」を發刊した。しかし時期が惡かつた。紙の制限やら何やらで、得意の企畫力を發揮すればするほど、雜誌は左前になつた。

それで止むを得ず、美粧院の宣傳の仕事などをしてゐるのだ。雜誌「航空路」の命數は旦夕に迫つてゐる狀態で、千倉が「航空路」に連載物を書いてゐるので、千倉には打ち開けないのだけど、「航空路」編輯所の電話は、昨日差し押へになつた。

『まごつくのは、もう倦きたよ。辭典の仕事と、君の雜誌の連載があれば、食ふには困らないだらう。僕だつて君、まごつかない生活をしたいよ』

千倉は旨さうにビールを飮んだ。その顏を見ると、それでも辭典の仕事なんか止せとは、美土路は云へなかつた。まして「航空路」は、明日をも知れぬ苦境である。

『はゝゝ。まごつくのは、君が元祖だつたね』

美土路は笑つて誤魔化して『お蔭で、僕もこの頃、まごつく癖がついたよ。朱に交れば赤くなるだね』

と、先刻の美粧院訪問の件を話した。

『同じまごつきでも、僕のは味氣ないまごつきだからなア。君のは、女護ケ島のまごつきぢやないか。美粧院へ行つて來た所爲か、君は色が白くなつた樣だよ。朱に交つてる癖に、白くなるとは怪しからん』

『じよ、冗談ぢやない。君はさういふ變なことを云ふから、ユーモア作家になつたんだ。第一、君は美粧院を女護ケ島なんて云ふけど、彼處に雇はれてゐる少女達は、朝は六時から夜は十一時まで働き通しなんだぜ。それで給料は現金拂ひぢやなく、例へば三月働いて、やつとお仕着のワンピースが自分の所有になるといつた風なんだ』

美土路は美粧院の經營を攻擊して、マダムへの憤慨を洩らした。これは、先刻の少女に聞いたのである。マダムを待つてる間、お茶を持つて來たあの少女を摑へて、根掘り葉掘り聞いたの

だ。

『驚いたね。上には上があるもんだな』

『上ぢやないよ。下だよ。君は少し、言葉に注意をする必要がある』

ビールが入つたせゐか、美土路は少し元氣になつて『彼處では君、一年に三十人も、逃げる娘がゐるんださうだよ。勝手に外出は許されんし、針へ出なけりやならんし、やり切れんのだらうね』

『全く、それぢや「白き奴隷」だな』

朱に交れば——で始まつた話が、結局「白」で落着した。この調子で世間を渡るのだから、千倉大人がまごつきの常習犯なのも、不思議はない。

その時、店のラヂオは子供の時間の放送を始めた。お馴染の花田女史の聲だ　恰度千倉君が、美土路のコップにビールを注がうとした時だつた。千倉の手元が狂つて、ビールは卓子に溢れてしまつた。

『まごつく所を見ると、家賃が溜つてるな』

美土路は笑ひながら、ハンケチを出して卓子を拭いた。千倉は、花田女史の家作に住んでゐるのだ。

『いや何うも——。あの聲を聞くと、ビールの味も何もないよ』

千倉は文字通り、味氣ない顏をして、溜息をついた。

三、箱入らず娘

千倉萬藏は、隣の花田邸から歸つて來た。三月三日、雛祭りの宵である。

『もう寢たのか』

六疊の部屋には、尋常三年の女の子が、微かな寢息を立てゝゐた。粗末な雛段には、寄せ集めの安物の人形が、チラリホラリ侘しく散らばつてゐる。傍で細君が縫物をしてゐた。甚だ雛祭りらしくない風景である。

千倉は、そのまゝ自分の部屋へ入つて行つた。

『お茶でも淹れませうか』細君が後からついて來た。

『うん』千倉萬藏、元氣がない。

彼は今宵、隣の花田氏へ家賃を拂つて來たのだ。しかし、三月三日に拂つた家賃が、何と去年の九月分なのだ。隨分溜めたものである。しかも今晩持つて行つた金は十圓だつた。一ケ月分の

家賃の半分にも足らない。辭典の金なんか、燒石に水だつた。とても一ケ月分は持つて行けなかつた。しかしこの家には、既に五十ケ月分の家賃は拂つてあるのだ。彼がこの家へ來てから五年になる。四年半の間は實に忠實に家賃を拂つた。

隣の御亭主花田龜吉は、四年半の間千倉に對して、友達みたいな親愛と尊敬を見せてゐた。家賃が拂へなくなつたこの頃は、露骨な不滿と輕蔑を千倉に示し出した。今晩、殊にこの印象が深かつた。

『私の方でも、稅金やら何やらで、家を持つてると、かゝりますからね』

馬の如き偉大な花田龜吉は、苦り切つてゐた。絢爛たる金屏風の前に、贅を盡した雛人形が、古典、モダン、鄕土色と、その妍を競つてゐた。龜吉の苦い顏と、洵にいゝ對照だつた。花田女史は姿を見せなかつた。

『この家も、いよ〳〵退却の時が來たな』

細君の顏を見て、千倉は思はず呟いた。

『えゝ。何處か探しませうよ。花田さんにお氣の毒ですわ』

『お氣の毒?』

千倉はまごついた。この細君は、時々意外なことを云つて千倉をまごつかせる。

『だつて、さうでせう。花田さんの家作は三四軒あるけど、皆弟さんや妹さん達が住んでゐて、家賃の上がる本當の家作と云つたら、此家位なもんですもの』

『なるほど。さういふ理屈になるかね』千倉は苦笑して『僕だつて、春江のことがなければ、こんな不愉快な家には居ないよ。春江が來やしないかと思つて、それで頑張つてゐたんだ』

春江といふのは、千倉萬藏の姪である。

彼女は、川越にゐた千倉の兄の長女で、この叔父と姪は、十年振りで會つたのだ。兄と千倉は交際つてゐなかつた。それは千倉の結婚が原因だつた。千倉の細君は水商賣をしてゐたのである。それで、親類中から千倉夫婦は閉め出しを食つたのだ。

ところが、その川越の兄が去年の暮に死んだので、千倉は久しぶりに遺族達と會つた。幼なかつた春江が、もう十七になつて、東京の銀行の給仕をしながら夜は夜間女學校へ通つてゐるといふことを、千倉はその時初めて聞いて驚いた。もつと驚いたことは、春江が一人で下宿してゐるといふことだつた。

『十七の小娘が、一人で下宿してゐるなんて——』

呆れた千倉夫婦は、早速春江を引き取つた。夫に死なれて氣が折れたと見えて、嫂は、それには反對しなかつた。千倉の家は大森だつたから、有樂町の銀行に通ふ春江には便利だつた。明る

い強氣な少女だつた。その春江が、この家へ來て十日目位に、家出してしまつたのだ。

それは、母親のやり方が悪かつた。元の下宿へ行つて、春江が夜學を休んで遊んでゐたといふ様なことを聞いた母親は、所もあらうに勤め先の銀行へ行つて、彼女の素行の取調べを賴んだのである。夫の急死で逆上してゐたのであらうが、こんなことをやられては、春江として立つ瀬がない譯である。

だが、家出した春江の置手紙も、これまた相當なものだつた。

『お母様は體面々々とばかり云つて、若い娘の氣持をちつとも分つてくれません。私とお母様とは、性格が違ふのです。私はお母様に甘えたことがありません。だから家庭は戀しくないのです。箱入り娘といふのがあるけど、私は箱入らず娘なんですの。叔父様のお家に御厄介になつてゐるのもお氣の毒ですから、私は此家を出ます。叔父様、今だから申し上げますけど、私が東京へ出て働いてゐるのも、實は家出をして來たんですのよ。私は何處へ行つても平氣です。今に偉くなつて、お母様を笑つてやります』

千倉は早速、彼女の母親即ち嫂を呼び寄せた。皆で方々探したけど、春江の行方は分らなかつた。

『あれから二月以上になるな――』

千倉は机の上に眼を落した。其處には手紙が二通載つかつてゐた。春江の妹文子から來た、春江宛の手紙だ。第一の手紙は、女學校の受驗準備の忙しい有樣などを書き綴つた、簡單なものだつた。第二の手紙は最近來たもので、グツと調子が變つてゐた。

『あたし達は、川越から中野へ越して來ました。お姉ちやんは、どうして手紙の返事を下さらないの。地圖を書きましたから、お休みの日に是非おいで下さい。お休みでなくとも、おいで下さい。この頃お母様は、お笑ひになることがありません。あたし達まで寂しくなります。お姉ちやんがちつとも來ないし、お手紙もくれないせゐだと思ひます――』

千倉はその手紙を手に執つて眺めながら、

『こんなに皆が心配してるのに、春江の奴、心臟の强い娘だなア。今頃はきつと何處かで、僕達のことを笑つてるだらう』

彼は今晩、何となくムシヤクシヤしてゐる。

『いゝえ、泣いていらつしやるわよ。泣き聲が聞える樣ですわ』

細君の聲は蕭やかだつた。

『泣く？　はゝゝ。春江が泣くもんか』

『いゝえ。あゝいふ方が却つて泣くものよ。きつと夜も眠れないで蹲いていらつしやるわ。可哀

相に――』

『はゝゝ。何をお前――』

笑ひながら細君を振り向いた千倉は、「おやじ」とまごついた。細君の眼に涙を見たのだ。

義理の姪、それも自分達の親切を裏切つて家出した娘のことを、この細君はこんなに親身に考へてゐるのだ。

千倉は、自分達の戀愛時代を思ひ出した。教養もなく財産もない彼女だつたけど、その純情が千倉の心を捕へたのだ。千倉は大學時代から作家志望だつた。新感の反對を押し切つて彼女と結婚した彼は、生活の爲に勤めなければならなかつた。それで厭々ながら、會社に入つたのだ。さういふ譯だから、會社へ入つても千倉はまごついてばかりゐた。思へば、彼が人生のまごつき街道へ第一歩を踏み出したのは、實に、彼女との戀愛が機緣だつたのだ。

『僕は、學校を出ると直ぐ結婚しちまつたからなア。獨身で小說を書いてゐたら、今時分は相當實れつ子になつて、春江の世話だつて充分出來ただらうになア』

これが千倉の癖で、つい考へなしに、相手の氣を惡くする樣なことを云ふ。云つてから、しまつたと思つた。『貴方に腕がないからよ』と云はれゝば、それつきりである。また、めそめそ泣かれても困ると思つた。

『あら。貴方は、これからですわ。春江さんだつて、探せば屹度見つかりますわよ。そしたら、今度こそ、家の箱入娘にして上げませうよ』

細君の聲は明るく彈んだ。これには千倉先生、完全にまごついた。しかし、そのまごつきは、何時か子供の時間のラヂオを聞いた時の樣な、味氣ないまごつきではなかつた。千倉の眸は、一瞬希望に輝いた。佗しい人生のまごつき街道にも、曇る日もあれば照る日もあるのだ。

四、女史の預り物

細い雨の降る午後だつた。

美土路八重次は大森の郊外でバスを降りて、千倉の家の方へ歩いてゐた。

『弱つたな、これは――』

美土路の足どりが少し亂れた。彼方から花田女史がやつて來るのだ。二人とも、顏は知つてゐた。しかし口を利いたことはない。

千倉の家の近所で、美土路が千倉と一緒に散歩してゐる時など、花田女史に逢ふことがあつた。千倉が紹介しようとしたこともあつたが、美土路は何時も斷つた。政治も語れば文藝も論

じ、頼まれゝば判りもしない美術のことまでも 嘴 を入れると云つた風な、近頃流行の安手な女性知識人を美土路は好まなかつたのだ。それに彼女は、貧乏な友人の大家さんである。理窟なしに、大家といふ職業には反感が持てた。

だん〳〵二人の間隔は接近した。美土路は例によつて横を向いて通り過ぎようとした。

『あの、美土路さんではいらつしやいませんか』

女史は、彼の前に足を停めた。

『はア――』

美土路はまごついた。よもや、女史から話しかけられようとは思はなかつたのだ。

『千倉さんがお引越なすつたの、ご存知でせうか？』

『え？　千倉が引越を――？』

美土路は、これは寝耳に水だつた。忙しくて半月ほど千倉と會はなかつたが――『そ、それで到頭立退きを――？』

『いゝえ。此方からは何も申し上げませんでしたのよ。それなのに、千倉さんたら「家賃借用證書」などを置いていらつしやいました』

『何の證書ですつて？』

『溜つてゐた家賃を、月賦で拂つて下さるんですつて』

『そんなものを書いたんですか。彼奴のやることは判らん』

美土路は憮然として『それで、何日越して行つたんです？』

『たつた今ですのよ。トラックに乘つてお發ちになりました。奥さん達は電車でいらした様ですけど――』

女史は思ひ出した様に『お引越先の所書が宅にございますから、お寄りになりませんか』

『さうですね』

女史の家の方角へ目をやつた美土路は、思はず『おや』と叫んだ。彼方からやつて來るのは、確かに、あの少女である。美粧院プラチナで彼を接待してくれた少女だ。

『君、君――』

俯向きながら通り過ぎようとした少女を、美土路は呼びとめた。

『あらツ？』

少女は赤くなつて、でも嬉しさうだつた。

『何處へ來たの？』

『叔父さんの家へ來たんですけど、引越しちやつたんですもの』

『あ、それぢや貴女は――』

『千倉君の、問題の姪か』

女史と美土路が、口を揃へて訊ねた。二人とも、それ〳〵千倉から姪のことは聞いてゐたのだ。しかし春江は、十日位しか千倉の家に居なかつたから、彼女の顔は二人とも知らなかつた。

春江はさすがに、羞しさうに頷いた。

『でも、まア、よく御無事で――』

女史は安堵の溜息をついて、しげ〳〵と春江を見詰めた。溢い眼、溢い聲だつた。美土路は、今迄想像にてゐたのと全然違つた女の姿を、女史に見出した。

『さア、御一緒に宅へ參りませう。叔母様から、貴女がいらしたら差し上げてくれと、頼まれた物がありますのよ』

女史は春江を、手を執らんばかりにして、家へ連れて來た。美土路も一緒だつた。

『上つて頂きたいんですけど、千倉さんは今お發ちになつたばかりですから、春江さんと御一緒に、直ぐ車で追駈けなすつた方がようございますわね』

女史は美土路にさう云つて、二人を玄關に待たした。

『これが千倉さんの番地です。阿佐ケ谷の一丁目ですのよ』

再び玄關へ出て來た女史は、美土路に千倉の所書を渡して『春江さん。これがお預り物ですわ。どうぞ――』

と春江に紙包を出した。

『まさか、君も美粧院を逃げ出して來たんぢやあるまいね』

車に乘つてから、美土路は小聲で春江に訊いた。一年に三十人も逃げる娘があるといふことを聞いてゐたからだ。

『あら酷いわ。私、とても優秀なのよ　前から居た人をドン〳〵追越して、主任さんの助手になつたのよ。それで、今日は特別休暇なの』

さう云ひながら、春江は女史から貰つた紙包を開けた。それは妹の文子から來た手紙だつた。さつき千倉の細君が、女史に頼んで行つたのだ。

『あら、こんなものが――』

二通の手紙の間から一枚の紙が出て來た。見ると、それは「家賃借用證書」だつた。

『コツソリ返して呉れたところは、嬉しいねえ。うん、嬉しいよ』

美土路は呟きながら、その證書をポケツトに收つた。

『まア、フウちやんの手紙だわ』

春江は貪る様に手紙を讀んでゐた。第二の手紙の三枚目の所で、彼女は鼻を啜つた。慥か三枚目には、『この頃お母様は、お笑ひになることがありません』と書いてあつた筈だ。

五、M男爵賞

さて、こちらは千倉萬藏である。

トラックの運轉臺に、運轉手と助手の間に坐つて、ガツタンゴツトン揺られてゐた。大森を出てから一時間半にもなるのに、やつと新宿を離れて甲州街道に出たばかりだ。トラックの荷が高いのでガードが潜れず、方々迂廻して大まごつきでやつて來たのだ。

『あゝ、やつとこれで清々したよ』

千倉は心の中で呟いた。大森の家は、最後まで不愉快だつた。

細君が阿佐ケ谷の方に安い家を探して來たので、引越のことを云ひに花田邸へ行つたのは、四五日前だつた。

『溜つてる家賃は、將來お拂ひいたしますから——』

千倉は附け加へた。これは細君の指令だつた。

『何時までに皆濟してくれますか』

花田龜吉は、卽座に切り込んで來た。その氣合は、家主的に滿點だつた。

『來年まで待つて下さい。その代り證文を書きます』

龜吉を隣人乃至友人と見做すことが出來なくなつた千倉は、反撥的にかう云つた。まさか友人には、證文なんて失禮なことは云へない。

『仕方がない。來年まで待ちませう。この金額ですと、收入印紙は十錢ですね』

龜吉はちやんと證文の印紙法まで研究してゐたのだ。

千倉がくさつて家へ歸つて來たら、その後を追駈ける様に龜吉がやつて來た。

『月々幾らといふことに決めませうか』

龜吉は眼を輝かして云ふのだ。

『そ、それは女房と相談してから——』

千倉はまごついた。其處までは考へてゐなかつたのだ。

『さうですか。それでと——、貸家札は出してもいゝですね』

『どうぞ』

千倉は、勝手にしやがれと思つた。

『いや、どうも。貴方もこの一年間は多事多端でしたな』

やつと安心したのか、龜吉は變なお世辭を云つて歸つて行つた。

龜吉の云つたエペントフルといふ英語が、妙に千倉の耳に殘つた。花田女史が何時か雜誌に書いた隨筆に「宅の主人は哲學者ですから――」といふのがあつた。大變な哲學者があるもんだと千倉は苦笑した。

『しかし、妙な男だ。事苟も家賃のことになると、あの男は潑剌たる所を見せる』

千倉はトラックの上で考へた。フラウが人の三倍も忙しいのに、亭主の龜吉は何もしてゐない のだ。偉大な體軀を持て餘してゴロ〳〵してゐる樣に見えたが、今度の事件で俄然、脚光を浴びて登場したといふ感じだ。

『武士を養ふはこの一日の爲なりか』

千倉は、講談本で讀んだ言葉を思ひ出して、急に可笑しくなつた。

何時の間にか雨が霽れてゐた。もうガードもなかつたので、トラックはまごつかないで走つてゐた。

その時トラックを追越して行つた自動車があつた。その自動車は急に速力を緩めて停車もた。そして自動車から飛び出した二人の男女が『おウい〳〵』と叫びながら、トラック目がけて駈け

て來るのだ。

『危い！』

運轉手は大まごつきで急停車した。運轉手より、もつとまごついたのは千倉だつた。二人の男女は、美土路と春江ではないか。千倉はトラックから跳び降りた。

今度は、千倉は美土路と春江の間に挾まつて、タクシーのクツションに納つてゐた。トラックはそのまゝ阿佐ケ谷の新居へ馳らせた。

『もう一つ、吉報があるんだ。こいつは凄いんだ』

一渡り報告を濟ませてから、美土路は勢ひ込んで『君の小說がM男爵賞を獲得したぞ！』

『え？　君の雜誌に連載してゐるあの小說か』

『さうなんだ。これで君も酬いられるし、僕も助かるといふもんだ』

『おい、美土路！　夢みたいだなア』

千倉は手を伸ばして、美土路の手を握つた。

M男爵賞といふのは、一種のユーモア賞である。M男爵は、今は巨萬の財産家だが、若い時分は酷く苦勞した人である。男爵はこのユー

モア賞を提供したのだ。貧乏や結婚生活の苦勞やらで、母堂は曾て一度も笑つたことがなかつたさうだ。それで男爵はユーモア小説の愛好者になつたのだ。母に代つて、笑ひを求めたのだ。『君の小説を讀んで、男爵が述懐したさうだ。「この小説を讀まれたら、母上もお笑ひになつたに違ひない」つて——』

『母親の笑顏か。僕は、賞金や名聲よりその言葉が嬉しいよ』

美土路と千倉の會話を聽いてゐた春江は、この時激しく肩を慄はした。妹の手紙を思ひ出したのだ。

『春江。泣かないでもいゝよ。お前にも、お母さんの笑顏が待つてるんだ』

千倉は彼女の肩を叩いた

『でも私、お母さんに合はせる顏がないわ。とても、中野のお家へ行く勇氣はないの』

『はゝゝ。お母さんはね、叔母さん達と一緒に阿佐ケ谷の家へ行つてるよ。引越の手傳ひに來てくれたんだ』

『あら、お母さんが？』

『おい、春江。今お前は、赤ん坊みたいな甘ツたれ聲を出したね。一度も甘えたことがないなんて、大きなことを云つた癖に——』

千倉は笑つた。

『あら。だつて私——』

春江はまごついて眞赤になつた。車の側鏡には、西空の夕燒が美しく映えてゐた。

びつくり交響樂

第一樂章

三好さんは萬年筆を卓子の上に投げ出して、バットに火を點けた。三疊の部屋である。廣い邸内は森閑としてゐる。

『洒落とは、二つの意味を持つ言葉である』

三好さんは、今自分が書いたばかりの英文に一瞥をくれて、直ぐ顏を反けた。グラフを主にした或る雜誌の海外版の爲に、日本の酒落について一文を草しかけてゐたところだ。

『かう書いてしまつちや、日本特有の洒落も、二重意味どころか、無意味だよ』

聽き手のない寂しい酒落を云ひながら、三好さんはバットを一服吸つた。

『アハヽヽ』

『ホヽヽヽ』

亞鉛塀一つ向ふの的場さんの家では、御夫婦が陽氣に笑つてゐる。別に氣の利いた洒落を云ひ合つてゐる譯でもないのに、よく、あゝ笑へるものだと思ふ。世の中は色々で、三好さんと來たら、自分で洒落を書きながら、苦い顏をしてゐる。

卓子の上の外國雜誌の裏表紙が三好さんの眼に映つた。マーナ・ロイの笑顏が、美しい色で刷られて、その寫眞の下に煙草の廣告文が出てゐる。『彼女は、一日に百回哄笑ふ時でも、この煙草で咽喉を痛めはしない』云々。

三好さんは苦笑した。氏は一日に三回でもいゝから、腹の底から笑ひたいのだ。（氏は元來陽氣なことか好きなのだ）それから日本語を存分に喋舌りたい。いや、せめて聞くだけでいゝから、日本語に接したい。それで態々、この窮屈な小部屋（元は女中部屋だつた）を書齋にしてゐるのだ。的場さんのとこの遠慮のない日本語が、この部屋に居ると一番よく聞えるからだ。

三好さんの奥さんは英國人である。震災直前まで三好さんは、橫濱のM商會のロンドン支店に勤めてゐた。その時に奥さんと馴れ染めたのだ。

日本へ歸ると直ぐ、三好さんは、東京で發行されてゐる英字新聞に入つた。在英時代にデーリー・メール紙などに寄稿してゐたのが履歷になつて、英字新聞入社のスタートは滑かだつた。

ところが去年、三好さんの弟が會社の金の使ひ込みをやつたので、尻拭ひの責任が三好さんの肩にかゝつて來た。そろ〳〵新聞社生活が厭になり何か事業をやりたがつてゐた三好さんは、それを機會に、奥さんの反對を押し切つて、新聞社を罷めてしまつた。退職金の一部分で弟の辨償をし、餘つた金で一旗上げようとしたのだ。だが奥さんは英國婦人氣質で、さういふ投機的

な企てには賛成しなかつた。それで仕方なく、方々の新聞雑誌に英文を書いたり飜譯したりしてゐるのだ。

三好さんが寛めてから、奥さんは外人經營の美容院に勤め出した。しかし見習が終つたばかりの夫人だから、收入としては大したものぢやない。

長女のローズさんは、デパートのB外人係になつて働いてゐるし、息子のベツク君は横濱の外人學校、ラファエル學院に通つてゐる。だから午後の三時頃までは、この廣い家も三好さん一人だけなのだ。家族が歸つて來ても、女房天下のこの家庭は、皆英語だ。

勤めてゐる時分は、社へ行けば同僚と日本語が喋舌れた。街でも店でも勿論日本語である。家で留守番ぢや、さういふ機會が惠まれない。三好さんが日本語に飢ゑるわけだ。

『あゝ詰らねえ。全く、やり切れん』

三好さんは、精力的な體を持て餘す樣に、立ち上つて居間へ入つた。圓盤ケースから、ハイドンの「ビツクリ交響樂」を取り出して、蓄音機にスウイツチを入れた。彼氏、このレコードが大好きである。いとも靜かなメロデーが、何氣ないテンポで進んで行く。

『このアンダンテ・アダヂオの長閑な奴が、急に、わツと俄鳴り出すんだからなア。ふゝ、あすこが耐らねえ。女房の奴は婚約時代はこの交響樂が好きだつた癖に、震災以來急に嫌ひになりや

がつた。「まるで地震の時の樣に吃驚する」つて吐しやがる』

三好さんは煙草の灰をこぼしながら、部屋の中を歩き廻つた。暫くすると果して、今迄溫和しくしてゐた全樂器が、この時とばかり喚き出した。

『何時聽いても胸がスウツとする。僕にも何か、素晴らしい、ビツクリする樣な事件が起らないかなア』

呟いてから、三好さんは耳を濟ました。勝手の方で『今日は。御免下さい』といふ聲がする。

『また肉屋の奴か――』

三好さんは臺所へと潤歩した。借金取りの擊退には、腹構へが必要だ。

『誰だツ』

扉を開けるや否や、三好さんは呶鳴つた。

『お宅の手紙が、私の所のポストに入つてましたから、持つて來ましたが――。玄關が閉つてましたから』

意外や其處には、角の山谷さんの御老人が立つてゐた。御不興蒙ひ難き尊顏だ。

『こ、これは何うも御親切に――。甚だ、その――』

三好さんは四十面を赧くした。望み通り、ビツクリはしたが、その代り、飛んでもない恥を掻

いちまつた。

第二樂章

横濱S町の洋食店「マドロス」屋へ、例によつて三好さんが入つて來た。彼氏、息子のベツク君を迎へがてら、一週に三回は横濱に現れるのだ。

ベツク君は十三歳だから、東京と横濱間の通學位、勿論平氣だ。三好さんは、退屈だから迎へに來るのである。長女のローズ孃は英國生れの所爲か、パパよりもママと氣が合ふが、ベツク君はパパと仲よしだ。

三好さんは横濱へ來ると、必ずこのマドロス屋で洋食を食ふ。それから徐ろに山手のラフアエル學院へベツク君を迎へに行くのだが、時間がある時は散歩をする。散歩と云つても、海を眺めたり外人墓地を逍遙したりする樣な、月並なものではない。本牧へ出張してチヤブ屋を巡るのだ。その時は、マドロス屋に預けてあるタイプライターを携帶して行く。これをもつて三好先生、チヤブ屋の女達に手紙の代筆をしてやるのだ。相手は、港々に去つて行つた紅毛のマドロス達だ。英文は達者だし風采は立派と來てゐるので、三好さんの人氣は大したものである。それに

手紙の代筆も、馬鹿にならない金になる。

しかし三好さんは、この洋食屋の親爺には、單なる博愛的道樂の樣に吹聽してゐる。英吉利仕込だけあつて、彼氏仲々お體裁屋だ。

『僕の家は、何しろ女房が英國人なので、月に何うしても三百圓はかゝる』

これが三好さんの口癖だ。だから、知らない人は三好さんを有産有閑紳士だと思ふ。しかし支出と收入は別物で、夫人と令孃の給料を合せても多寡が知れてゐる。三好さんの原稿料を足しても三百圓にはならない。退職金の殘額は夫人が握つてゐるのだが、それでも時々、肉屋や乾物屋の拂ひが溜まる。

『やア、三百圓の旦那、二三日お見えになりませんでしたな』

親爺が愛想よく椅子を奬めた。三好さん、此處では三百圓の旦那で通つてゐる。

『うん。どうだね、景氣は』

三好さんは悠然とテーブルに就いた。

『景氣と云へば、旦那――』

親爺が何か云はうとする時だつた。

『旦那々々、當りましたよ。大當りです』

と椅子を蹴倒して飛んで來た男がある。見ると、給仕頭の田村だ。

『ビツクリするぢやないか。何うしたんだい？』

三好さんは、田村が恁麼に興奮したのを見たことがなかつた。田村は、もう五十年輩で、若い頃外國へ行つてたと云ふが、今は天涯孤獨の身の上である。

『二千圓、二千圓！　何時がホラ、旦那に頂いたでせう。あの入場券が當つたんです』

『入場券？　ああ、萬國博覽會のか――』

三好さんは、しまつたと思つた。當ると分つたら、やるんぢやなかつたと後悔した。この春べツク君の進級祝ひに、三好さんは萬年筆を買つてやつた。その時の福引に當つたのが、その入場券なのだ。

『景品はパパに上げるよ。どうせパパは我が家の景品だから』

ベツク君は笑ひながら、景品の入場券を三好さんに進呈した。それを更に、三好さんは田村に呉れたのだ。

『旦那、只で頂いた入場券で二千圓てえのは、少し冥利に過ぎます。山分けにいたしませうか』

田村は善良さうな眼を瞬いた。

『おい、田村！』

三好さんは嬉しさの餘り、立ち上つた。外國流に握手しようとしたのだ。

『こら、こら。失禮なことを申し上げちやいけないよ。泥棒ぢやあるまいし、山分けなんて、それぢや折角の御好意を無にするもんぢや。お詫びを申し上げな。いや、二千圓が「三百圓の旦那に當らないで、ボーイ頭に當つたてえのは、神樣の思召でござんすねえ』

横合ひから親爺が、差出口を入れた。

『うん。さう云へば、さうだ』

三好さんは肩誘しを喰つたお相撲さんみたいに、ドタリと卓子に手をついて、坐つた。

『どうも相濟みません。旦那、これで私も助かります。この店も賣りに出てゐますし、實は身の振り方を心配してゐたところでした。二千圓あれば、何か小商賣やれます』

田村はペコ〳〵頭を下げた。

『旦那。今日は、何時か御傳授に預つたカツレツ・ア・ラ・ナポレオンといふ奴を拵へませうか』

親爺は好意に滿ちた語調で、三好さんの御意を伺つた。

『ナポレオンでもライオンでも、何でもいゝから持つて來い』

三好さんは卓子を叩いた。親爺はビツクリして、首を振り振り調理場へ引込んで行つた。

『おい。このクレム・ド・オーレは、いやに黒くてドロ〳〵してるぢやないか』

彼方の卓子で、ベレー帽を横つちよに被つた色の青黒い青年が、田村に文句を云つてゐる。

『エヘヽ。外國歸りの方は皆、さう仰有います』

田村は嬉しさうにお辭儀をしてゐる。それを見た三好さんは、何か熱いものを胸に感じた。クレム・ド・オーレなら濃い珈琲だから、黒くてドロ〳〵してるのが當り前ぢやないか。外國に長く居たといふ田村が、それを知らない譯はない。それなのに、今日はあんなトンチンカンなお世辭を云つてゐる、二千國が餘程嬉しいのに違ひない。

『いゝなア。彼方は幸福なんだな』

三好さんは溜息を吐いた。

三好さんは昨日、生れて始めて質屋の暖簾を潜つた。長らく温和しくしてゐたから、一つ、ビツクリ交響樂みたいにウンと豪遊して暴れて見たかつたのだ。退職金は夫人が管理してゐるし稿料は生活費に取り上げられるし、氏のポケツトマネーは何時も乏しい。横濱へ來ればこのマドロス屋へ必ず寄るのも、此所は借りが利くからだ。

『誰方ですか』

質屋の主人がいきなり訊ねた。三好さんはムツとした。金を盜みに來たのぢやあるまいし、不審訊問を受ける理由はないと思つたのだ。三好さんは返事をしなかつた。

『判をお持ちですか』

質屋は疊みかけて來た。三好さんは、かう面倒臭いものとは豫期しなかつた。

『質面倒なことを云はんで、品物を見てくれ』

三好さんはお得意の酒落で催促した。品物は英國時代に作つた燕尾服だつた。質屋は不精無精それを引つくり返してゐたが、

『大分傷んで、流行遲れですな。お持ちになつた方がいゝでせう。拾圓に屆きませんから――』

と素ツ氣なく返した。三好さんは、憤然として質屋を出た。家へ歸つて見たら、卓子の上に置いた筈の墓口が、床の上に投げ出されてゐた。開けて見たら、中は空ツぽだつた。拾圓に屆かぬ金が入つてゐた筈だ。現金專門の空巢にやられたのだ。

『質草が拾圓に屆かないと云つて斷られて、拾圓に屆かない小遣が盜まれた。この損得は幾何なりや』

追ひがの三好さんも、算術の二重意義は不得手だつた。徒らに、泣面に蜂の憂目を見たばかりである。

『旦那。何を考へていらつしやるんで？』

料理の皿を持つて來た親父が、三好さんの傍の椅子に坐り込んだ。

『いや、なに――』

『實は旦那、國元へ歸る事情になりまして、この店を賣りに出したんですが、買手がつかなくて弱つとります。八千圓といふ云ひ値でしたけど、旦那なら五千圓にしときます。如何でせうか』

『ぼ、僕が――？　この店を？』

三好さんは愕てた。

『えゝ、旦那なら外國料理には詳しいし、奥さんは外人で、お綺麗で愛嬌がおありなんださうですから、持つて來いです。場所が場所ですから、外人の客が澤山附きますぜ』

『ま、ま、その話は少し考へさせてくれ』

三好さんはカツレツも咽喉に通らなかつた。

『お歸りになつて、奥さんと御相談下さいまし』

親爺は、大いに三好夫人に期待をかけてゐる風情である。無理もない。三好さんは奥さんのことを、まるでウインザー公夫人の妹君ぐらゐに吹聽してゐたのだ。

『如何ですか。カツレツ・ア・ラ・ナポレオンは？』

親爺は三好さんの顏を覗き込んだ。

『肉が硬いね。齒が立たないや。まるで家の女房、いやナポレオンの女房のジョセフインみたいだ』

三好さんは顏をクシヤ〳〵にして誤魔化した。

第三樂章

日曜と八の日が重つて、珍らしく一家揃つた午食だ。

『パパ。二千圓は惜しかつたね』

ベツクの奴が、うつかり云ひ出した。三好さんは唇へ指を持つて行つたけど、遲かつた。

『え、二千圓――？』

奥さんは碧い眼を剝いた。あの日橫濱からの歸りにベツク君に打ち開けたのが不可なかつた。到頭三好さんは、ロンドン夫人の前で凡てを告白しなければならなかつた。果して、彼女の御機嫌は甚だ險惡になつた。

『二千圓あれば、パパが女中を雇へるのに――』

パパ思ひのベツク君はどうしても、二千圓が思ひ切れないらしい。

『パパが女中を――？　飛んでもないことです。パパが女中部屋に居るのは、卽ちパパが女中の代理であることを自ら示すものである』

河馬みたいな體に、恥しくもなく、薔薇の花の模樣のドレスを着たこのロンドン夫人は、體に似合はぬ金切聲で喋り立てた。このキイ〳〵聲の英語を聞いてゐると、三好さんは、日本語が聞きたいから女中部屋へ行つたんだなどと、辯解する氣にもなれなかつた。英語はもう、聞くのも喋るのも、讀むも書くもうんざりである。

『他の部屋があるのに、女中部屋を書齋にするなんて、パパはどうも趣味が卑しいのね』

ローズ嬢は兎角ママの側に立つ。

『全くパパはこの頃駄目になつた。ロンドンに居た時分は、パパも一萬圓儲けたぢやないか』

ママは齒擦りさうに云つて、パパを睨んだ。事實三好さんは、一萬圓を儲けたことがあつた。それはロンドンの困窮時代だつた。日本の貨物船K丸を契約して、佛領アフリカのチュニスに廻らせ、其處で過燐酸肥料の原料燐礦石を積んで日本へ送つたのだ。その利益の一割が、卽ち一萬圓だつた。

『一萬圓どころか、パパなんか、見す〳〵入る二千圓を棄てちやふんですもの。かういふパパには、絕對に機會は來ないわ』

ローズはいゝ氣になつて、ママに雷同した。

『お前なんかに日本人の義理人情が判るか。たゞた二千圓で、孤獨な老人が人生の新しいスタートにつけるんだ。あの男の喜んだ顏をお前に見せたかつたよ』

『他處の男を喜ばせる前に、自分の家族を喜ばせるべきだ。パパと結婚したのが私の失敗だつた。大戰後の男旱でなかつたら、私は英國の紳士と結婚するんだつた』

ママは子供達の前で公然とパパを侮辱した。

三好さんは憤然と食卓から立つた。かういふ時、「ビツグリ交響樂」をかけると、いくらか氣が紛れるのだけど、奥さんがあのレコードは嫌ひだから、誰も居ない時でないと掛ける譯には行かない。

三好さんは自分の前にあつた皿を三枚、默つて抱へ上げて緣側に出た。彼はその皿を一枚づつ、いとも靜かに敷石に落すのだ。ガチアン……ガチアン……。だん〳〵三好さんの腹の蟲は納つて來た。ママはローズ嬢と顏見合せて、輕蔑の笑ひを交はした。ママが三好さんと喧嘩する時は、遠慮なく皿を三好さんの眉間に投げつけるのだ。

第四樂章

三好さんは本牧のホテル街を出て、バスの通りを俯向きながら歩いてゐた。今日は、ラブレターの代筆が金にならなかつたのである。

彼女達の愛人から返事が來て、その手紙の中に爲替でも入づてゐなけりや、お禮の金は貰へないのだ。この頃は世界中がせち辛くなつたのか、餘り氣前のいゝ返事は來ない。

『あゝ、世の中が厭になつた。重いタイプライターをぶら下げて、いくら名文の手紙を書いてやつても、草疲れ儲けだ』

三好さんはギッシングの短篇「地の鹽」の主人公を思ひ出した。人には金を借りられ、賴まれれば人の爲に只働きをするあのトマス・バードが自分自身の樣な氣がした。さう云へば女房も、地震の時に、『貴方は地の鹽だ。貴方だけが賴りだ』と云つた。

『あ、もうベックが學校から歸る時分だ』

三好さんは、惶てゝ、向へ側へ來た。バスに乘らうとして道路を橫切つた。瞬間バスの警笛が聞えて、大きな事體が網膜に寫つた。

それツきり、三好さんは記憶がなかつた。

× ×

三好さんが意識を回復した時は、本牧の近くの外科病院のベットに寢てゐた。

氣がついて見ると、顏中繃帶である。眼の所だけ開けてあるが、眼も酷く腫れて、滿足に開いてゐられない。舌の先を動かして見たら、前齒が前部脫落してゐた。手と脚は別に異狀がない樣だつた。これと云つて痛い所もない。

バスの前方から、車輩の下に捲き込まれたのださうだ。出血が多量だつたが、內出血もないし胸部や四肢も助かつた。早速この病院に擔ぎ込まれたのだが、急を聞いて驅けつけた奧さんが、ビツクリして卒倒したなどといふ景品まであつて、大變な騷ぎだつた。

『オヤ』

枕許に立つてゐるのはミセス三好ではない。もつと若くて、もつと美しい日本の女が三人、服裝から云つても看護婦ではない。それが自分の顏を見て微笑んでゐるのだ。部屋の中は草花で一杯だし、三好さんは天國へ來たのかと思つた。

『アラ。氣がついて？　あゝ、よかつた』

三人の女は聲を彈ませた。その聲で、三好さんは思ひ出した。チヤブ屋の女達だ。

『あ、有難う』

三好さんは嬉しかつた。

その時奥さんが入つて來た。女達は出て行つた。

『今の女達は誰？』

奥さんの第一の挨拶はこれだつた。三好さんはムツとしたが、暫く考へて、

『あれは、僕のファンだ』

と態と日本語で云つた。第一前齒がないので、捲舌の英語は前倒臭い。ロンドン夫人だつて、勿論日本語は解するのだ。

『貴方のファン――？』

奥さんはビツクリした。

『僕が新聞雜誌に書く文章の、彼女達は愛讀者なんだ』

『まア、貴方の文章がそんなに有名だつたのか』

奥さんは旦那樣を見直した樣な、また不安さうな眼で『あの女達は毎日、花を持つて來ました。この通り――！』

と夥しい草花の鉢を指さした。

『日本の女は、かういふ時は何時も親切だ』

三好さんはニヤリとした積りだつたけど、繃帶で、笑顏はかくされてゐた。

『日本の女――？』

と言ひかけて奥さんは『貴方は今日、どうして英語で話さないのか』

『英語？　怪我の爲に、英語はスツカリ忘れた』

三好さんは旨く誤魔化した。これから、もう日本語ばかりで暮す決心をしたのだ。

『あゝ、私の母國語を私の良人が忘れてしまつたとは！』

奥さんの河馬の如き顏は、見る〳〵蒼くなつた。また卒倒するんぢやないかと心配して、看護婦が驅け寄つて來た。奥さんは卒倒はしなかつたが、椅子に崩折れてオーン〳〵泣き出した。

『おゝ、さうだ。英語の忘却は脚二本を失つたより不幸だ。精神的の廢人だ。傷害保險の全額を要求する權利がある』

泣いてゐた奥さんが、急に立ち上つて喚いた。

『傷害保險！』

云はれて、三好さんは思ひ出した。震災に懲りて、三好さん一家は傷害保險に入つてゐるのだ。東京に支店のある英國の保險會社だつた。三好さんは五萬圓入つてゐる。

『そ、その通りだ。英語を忘れたから、僕はもう原稿が書けない。完全な廢人だ。申し分のない不具者だ。全額を要求してくれ』

三好さんは、自分を憐いてくれた運轉手を拜みたくなつた。保險金の受取人の名儀は自分だから、當然自分が受取る權利があるのだ。今や、在英時代の三好さんと、三好さんが違ふ。あの時貨物船で儲けた一萬圓は女房の爲に使つたけど、今心した。退職金の場合だつて、女房の反對を押し切つて退社したのだから、その弱味で、女房の管理に委ねてゐるのだけど、今度こそは全く天の配劑だ。

『時到れば、懦夫變じて勇者となる』

三好さんは奥さんに判らない日本語で呟鳴つた。

『あゝ、いよ〳〵知性喪失だわ』

奥さんは世にも悲しい顏を左右に振つた。

×　×　×

入院してから一ケ月は經つた。二三日前から三好さんは室內の步行を許された。

繃帶は除れたけど、齒の治療はこれからである。案外顏には傷が殘らなかつた。顎の下側の傷が一番ひどかつたけど、正面から見ただけでは判らない。

『大變でしたねエ』

見舞に來たマドロス屋の親爺だ。

『あゝ、退屈には弱つたよ』

三好さんは、頰の肉は少し落ちたが、そのため却つて苦味走つて、以前よりもいゝ男になつた。

『お蔭でと云つちや語弊がありますが、いや、全く旦那のお蔭で、私も安心して國へ歸れます』

親爺は嬉しさうだ。三好さんは愈々マドロス屋を買ふ契約をしたのだ。保險金は、全額ぢやなかつたが、結局三萬圓とれた。これ偏へにロンドン河馬夫人の辣腕のお蔭である。『母國語の喪失、精神的廢疾』を極力主張したのだ。何しろ相手が英國の會社だから、母國語が效いて、大いに讓歩したらしい。

『退院したら、あの店をウンと擴張して、ジヤン〳〵やるよ。どうも僕は、あゝいふ商賣が一番性に合ふ樣な氣がする』

三好さんは腕を叩いた。

『田村はやつぱり使つて頂けるでせうか』

『あゝ、給仕頭か。當人が望みなら、勿論使つてやるよ。僕はあの男は好きだ。根は陽氣な癖に

妙に寂しいとこがある』

『パパ。元氣になつたね』

其處へ學校歸りのベック君が入つて來た。

『ママは何うしてる？』

三好さんは訊ねた。

『洋食屋なんて紳士のやる商賣ぢやないと云つて、毎日怒つてゐる』

實際、この問題では夫婦間に大論爭があつた。しかし保險金は三好さんが握つてるし、何しろ英語と日本語の喧嘩だから、三好さんが負ける道理がない。それ以來、奥さんは一度も病院へ見舞に來ないのだ。

『それからね、パパ。姉さんとママがこんなことを云つてたよ。「パパにあんな美しい女のフアンが澤山あるとは知らなかつた。あたし達の留守の間に、きつとパパはあの女のフアン達と遊んでゐたらう」つて——。そしてママは泣いてた』

『いゝ氣味だ。美しい女のフアンか——。ふア〳〵〳〵』

三好さんは、齒のない口を大きく開けて笑つた。

終結章

マドロス屋は今夜大賑ひである。外國船がハマに入港したのだ。

すつかりマスターになり切つた三好さんは、外人の船員と、それを連れて來た本牧の女を相手に、愉快さうに談笑してゐる。

一日に百回笑ふマーナ・ロイを羨しがつてゐた三好さんだが、今ぢや彼も「笑つて暮らすい い男」だ。

ロンドン夫人とは別居してゐる。彼女は何うしても洋食屋のお神になるのは厭だと云ふのだ。ベック君だけは學校の歸り——、まだ店の靜かな時刻に、毎日寄つて行く。

三好さんは、ベック君が來るまで午食を食はないで待つてゐる。親子二人で食卓を共にして、それから店のダツトサンにベック君を乘せて驛まで一緒に送つて行く時が、三好さんには一番幸福な時間だ。

「いゝなア。俺にもあんな可愛い子供が欲しい。旦那は樂しみだ』

店の前で車を見送りながら、給仕長の田村が何時も溜息を吐く。

田村が二千圓貰つてホク〳〵してる時、三好さんは田村の頓珍漢ぶりを眺めて、これと同じ溜息を吐いた。二人は妙に似てゐる。

『今だから白狀するけど、貴方に上げた手紙は、みなこのマスターが書いてくれたのよ』

本牧の女が外人の船員に笑つて云つた。

『急に手紙が旨くなつたので、どうも怪しいと思つてたよ。でも、君の情夫の代筆ぢやなくてマスターの代筆と聞いて、安心した』

『はゝア、情夫の代筆だと思つたので、それで金を餘り送らなかつたのだね』

三好さんの言葉に、男も女も哄笑した。

『あ、女房だ。いけねえ』

三好さんはビツクリした。今、入口から入つて來たのは、何と三好河馬夫人だ。

三好さんは田村を呼んで、何か囁いた。

『へえ、あの恐い御婦人が奥さんですか？』

田村はビツクリした顏で、

『何時も旦那は、うちの女房は綺麗で愛嬌があると仰有つてましたが――』

『はゝゝ。人間は情氣てる時に限つて、法螺を吹きたくなるものさ。ねえ、さうだらうタービ

ン！』

三好さんはお客の外人に話しかけた。

『おや、貴方は英語を喋舌つてるぢやないか』

奥さんが凄い形相で近寄つて來た。

『しまつた。即かれちやつたか』

三好さんは頭を掻いた。

『貴方は、妻の私を騙しましたね。貴方は女のファンと、何時もかうして酒を飲んでゐるのか』

奥さんは詰め寄つた。

『いやマダム。マスターのファンは僕だ』

外人マドロスが話を引き取つた。

『えツ、貴方が良人のファン？』

『さう。マスターのラヴレターの愛讀者は僕だ。貴女の良人は、實に文學的な英文を書く。ここに持つてゐる』

マドロスはポケツトから、その「ラヴレター」を取り出して奥さんに渡した。

奥さんは顫へる手で手紙を披いた。何だか憶えのある文章である。

彼女は首を捻りながら讀んで行つた。店の片隅から、靜かなアンダンテ調の曲が流れ出した。
先刻田村が三好さんの吩咐で、レコードをかけたのだ。この靜かな音樂が、奥さんの記憶を甦らせてくれた。
『おゝ！　婚約時代に私が貴方に送つた手紙と同じ文句だ。貴方はこんなに詳しく、私の手紙を憶えてゐてくれたのか』
奥さんは大きな目で三好さんを見詰めた。
『あの時分は、君も優しくて、そして美しかつた。二人は何時も――』
三好さんが云ひかけた時だつた。靜かだつたレコード音樂が、突然がなり出した。
「ビツクリ交響樂」だ。田村にこのレコードをかけさせたのは、奥さんの嫉ひなこのレコードで彼女を撃退しようといふ三好さんの魂膽だつたのだ。
『おゝ、ビツクリした！　助けて――』
最後の喧騒曲のところで、てつきり奥さんが逃げ出すと思つてゐた。ところが逃げ出す所か奥さんは、三好さんに抱きついた。
『大丈夫だ。俺がついてる』
三好さんは優しく奥さんの背中を叩いた。

『もう私は離れない。私はこの店へ來ます』
奥さんは三好さんの胸に顔を埋めた。
店中に拍手が起つた。
三好さんと田村の眼がカチ合つた。二人は華かな拍手の裡に、ビツクリした眼で見合ひながらこの時も例の、共通の溜息を洩らした。

御婦人に限る

一

『來過ぎたかな。慥かにこの通りだと思つたが――』

『だから僕が先刻、公衆電話の所を入つた横丁だと云つたんだ。だが、お互ひに銀座は暗いなア』

『全く。銀座へ來たのは、今年になつてから何度目かしら？』

これは志賀君と云つて、牛込の某中學の數學教師である。古びた地味な洋服を着てるから、老けて見えるけど、年はまだ三十五だ。連れの北澤君と來たら、もつと身裝が酷い。尤も、この方は四十を越してゐる。商賣は蓄音器の製作だ。

『おい、ちよつと見ろ。怪しからんね』

志賀君は北澤君を突ついた。目の前を、中年の男と若い女が、肩をぶつつけ合ひながら歩いて行く。いくら銀座でも、かういふ風景は、教師たる志賀君の目に餘るのだ。

『全くだ。いゝ年をしやがつて――』

いゝ年をした北澤君が呟いた時だつた。その女が、いきなりハンドバツグを地面へ叩きつけた

のだ。そして持つて居た雜誌か何かで、男の横ツ面をビシヤンとやつて、そのまゝ男を置きざりに、トツ〳〵と早足で行つてしまつた。志賀君と北澤君は、茫然と立ち止つた。

『何だ。僕は、巫山戲散らしてるのかと思つたら――、本物の喧嘩か』

『呆れたね、今時の女は――』

二人は、地に捨てられた眞新しいハンドバツグを眺めて、囁いた。中年の男は、赤くもならずそれを拾つて悠々と歩き出した。

『君、この問題を何う解くかね』

志賀君は、所構はず教室での口癖が出る。

『問題――』

『何故女がハンドバツグを叩き付けたかといふ――』

『さうだな。あの女は年から云つても、細君ぢやないね。男が銀座でハンドバツグを買つてやつたんだ。そして、それを餌に何處か怪しい所へ連れて行かうとしたんだ。それで女が怒つたんぢやないかと、まア僕は想像するけど――』

『僕は少し遖ふ。あの男がね、途中で他の女に見惚れたか、或ひは挨拶したかしたんだ。それで女が嫉妬をやいたのさ』

『それ位のことで、女が、大事な持物を投げ付けやしないよ』

『さうかなア』

と志賀君は首を傾げて『どうも、問題が完全に解けないのは不愉快だ』

『あゝいふのが居るから、銀座は怖い。さア、後戻りして、また探さう』

かくして二人がやつと探し當てたのは、豪華な喫茶店だつた。

『これを、かけてくれんか』

北澤君は、飲物を文注する前に、レコードの目錄を開いて、一枚の管絃樂を所望した。この店の蓄音器が素晴らしいと聞いて、そこは蓄音器の製作者、それを聽きに、はる〳〵銀座まで出て來たのである。

『何アんだ。大した蓄音器ぢやないや。あのレコードなら、ここんとこで、指揮者のタクトの音が入つてる筈だ。それが聽えないぢやないか』

北澤君は志賀君を顧みて、輕蔑の笑ひを洩らした。

『タクトの音？　樂器ぢやあるまいし、タクトの風を切る音が、まさかレコードに入るまい』

志賀君は納得し兼ねた。

『ところが、僕の蓄音器なら、ちやアんと判るんだ。一つ、證據を見せようか』

北澤君は風呂敷包を開けようとした。彼氏は何處へ行くにも風呂敷包を背負つて出掛ける。風呂敷には、自分が作つた中で一番出來のいゝ蓄音器が、包んであるのだ。火難盜難の用心もあるが、行く先々で、氣に入らない蓄音器があると、早速自分の蓄音器を出してレコードをかけて見せて一應は比較して貰はないと氣が濟まない。兎に角、一風變つてゐる。志賀君はそれを知つてゐるから、此處でそれをやられちや敵はないと思つた。

『大人しく聽いて居ろよ。銀座は怖いぜ』

『僕の口眞似をしてやがる。だが、先刻の女の樣な奴が飛び出して來て、大事な蓄音器を壞されちや耐らないな』

北澤君は苦笑して、蓄音器を出すのを止めた。

北澤君は蓄音器の製作者と云ふよりは、寧ろ發明家と云つた方が適當で、サウンド・ボツクスの熱心な研究家である。今までジエラルミンで作つてあつたのを、彼の創案で、或る木材を用ひて震動を出す樣にしたのだが、事實、非常に優秀である。それも、出雲から出る木でないと駄目だださうだ。何時か木會の本を用ひて見て失敗したと語つたことがあるが、つまり、その程度に凝り性なのである。サウンド・ボツクスのことになると、食ふことも寢ることも忘れる。レコードを聽いてゐる時は、彼の大きな耳が、まるで兎の耳の樣にピンと聳つから、全く恐いみたいであ

る。

志賀君が北澤君と知り合になつた動機は、志賀君が家庭教師に行つてゐる五年生の佐久間といふ生徒の父親が、自動車工場の持主で、その佐久間氏の所で二人は紹介されたのだ。

佐久間氏は北澤君のパトロンで、『特許も取つてゐるのだし、蓄音器の製作工場を建てゝやるから技師にならないか』と奨めてくれるのだが、何しろ北澤君の條件が難しくて、その通りにやれば、一週間にせい〳〵一臺位しか作れさうにもない。これでは迚も採算がとれないので、折角の工場技師もフイになり、依然として家庭工業でやつてゐる。さういふ氣質だから、何時も貧乏だが、細君は國元に置いてあるし、彼氏は貧乏なんか平氣である。

『この間白隱和尚獨妙禪師の傳記を讀んだがね。恰度僕の年と同じ四十三歳の時の日記に「厨下枯淡益々甚し」と書いてある。赤貧洗ふが如しなんて云ふと、何だか物欲しさうだが、厨下枯淡は嬉しいぢやないか』

かう云つて、彼が志賀君と笑つたことがある。聊か彼の風丰を物語つてゐる。志賀君は、かういふ人物が好きなのだ。

二

五年B組の幾何の時間である。

白墨の粉をパツ〳〵と飛ばしながら、黒板に三角や圓を描いてゐた志賀君が、ふと後を振り向いた。

『こら。佐久間、何をやツとる』

志賀君は教壇を降りて、ヅカ〳〵と佐久間の机へやつて來た。佐久間と云ふのは、志賀君が例の家庭教師に行つてる生徒だ。

佐久間は狼狽てゝ、紙製の將棋盤と駒を隱さうとした。

『怪しからん。お前達は授業中に碁をやつてたのか』

『先生。これは碁ぢやありませんよ。將棋ですよ』

志賀君は、佐久間と隣の菊池とを睨んだ。

佐久間は吹き出した。家庭教師だから、餘り怖くない。

『馬鹿。碁も將棋も同じぢやないか』

志賀君は照れながら、教壇へ戻つた。

『先生』

圖體の大きい級長が立ち上つた。

『何だ』

『近頃クラスの氣風が弛みましたから、肅正のために、これから級大會を開きたいんです』

『ヒヤ〳〵』

『賛成』

方々から聲が起つた。

『肅正大會か。よからう』

志賀君は同意した。

『それでは、先生の御退場を願ひます』

級長に云はれて、志賀君は、これ幸と教室を出た。拍手の音が扉から洩れて來た。生徒達は、授業が潰れて喜んでゐるのだ。

『五年生になると、やつぱり違ふ。自肅自正の精神が出て來る』

志賀君は獨り合點で感心しながら、物理研究室に入つた。これから志賀君の道樂が始まるの

だ。彼の道樂といふのは、硝子板に線を引くことである。と云ふと、何でもない樣だが、これが中々大した代物で、彼は一糎平方の硝子に千本以上の平行線が引けるのだ。これは詰り、グレーテングと稱してプリズムの代用になる。光線を分解して、黃色のナトリウム線を放射させるのだが、ナトリウム光線は波長が一定不變だから、精密工業の物指に使はれる。だから、今ではこのグレーテングは頗る金になるのだ。しかも志賀君のは、機械で造つた輸入品よりも、遙かに精巧だと云ふのだから偉い。無名の中學教師にしては、珍らしい特技の持主である。

無名とは云ふけど、彼は物理學校の專攻科を優等で卒業したから、高等學校教授の資格は持つてゐる。或る高工に勤めてゐる友人が、高工へ來る樣に頻りに奬めるのだ。けど彼は頑として中學から動かない。それに、三十五にもなるのに未だ獨身だ。變物北澤君と親友だけあつて、彼も確かに奇物だ。

彼は目をギヨロリと光らせて、グレーテングに取りかゝつた。彼の目の大きいことは有名で、或る生徒が、

『先生の目は、眠つてる時でも、人並の目位に光るでせうね』と云つた言葉で、ほゞ想像が出來る。

北澤君の耳と好一對だ。

『あれ。級長が演説してるぞ』

志賀君は仕事の手を休めて、耳を澄ました。風の具合で五年B組の教室の騒ぎがよく聽える。

『諸君も勉強し給へ。僕は勉強したんで、級長になつたんである。諸君も級長になりたかつたら——。（笑聲）眞面目に聽いて下さい。近頃撞球へ行つて學校をサボる人があります。甚だ——（騒然たる物音）』

演説者が代つたらしい。どうも、確かに佐久間の聲だ。

『諸君。撞球だつてスポーツである。（將棋もスポーツかといふ聲あり）將棋は、點と線と面とより成る。これ幾何學の大原則にして、かのピタゴラスが——（笑聲又笑聲）』

チエツ、僕の綽名を云つてやがる——志賀君は苦笑した。彼の綽名はピタゴラスなのだ。

禁慾主義者で、數の哲學の開祖であるピタゴラスは、志賀君の大いに崇拜するところで、自然教室でもピタゴラスピタゴラスと云ふものだから、何時の間にか綽名にされちまつたのだ。

ピタちやんなんて、失禮な呼び方をする惡童もゐる。

本物のピタゴラスこそ、いゝ面の皮だ。

『諸君。ギリシヤはスポーツの淵源である。だから撞球をやつても、ピタ公は怒らないだらうと吾輩は思ふんであるんである』

佐久間の奴、調子に乘つて喋舌つてゐる。ピタ公なんて、甚だ怪しからん。

『駄目だ。やつぱりこの仕事は、放課後でないと、氣が散つていかん』

志賀君は諦めた。その時、第三時間目の終りを告げるサイレンが響いた。

『佐久間の野郎、この頃生意氣になつた。今度お袋に云つてやらなきや——』

首を振り〳〵、志賀君は教員室へ歩いて行つた。

三

日曜の朝、志賀君は階下のお神さんに夢を破られた。

『先生。佐久間さんの奥樣がいらつしやいましたよ』

『奥さんが——？　早いんだなア』

『早いもんですか。もう十時ですよ』

仕方なく志賀君は起きて、大急ぎで浦團を疊んだ。二階借りは恁ういふ時困る。

『おやすみの所を、まア、どうも——』

とか何とか云ひながら、佐久間夫人が上つて來た。

この夫人は若作りで和歌作りで——と云ふと洒落みたいだが、兎に角、多趣味な派手な社交家だ。

志賀君は挨拶をしながら、伴の佐久間少年の素行について苦言を呈しようと、チヤンスを狙つてゐた。

『先生。この間の寫眞、お氣に召しましたかしら？』

『寫眞——？』

志賀君は欠伸をした。まだ寢足りないのだ。

『まア、先生の暢氣には呆れます。あんな綺麗なお嬢さんの寫眞を、三枚も持つて參りましたのに。いくら學校の先生でも、それぢや世渡りは出來ませんわ』

苦言を呈しようと思つてゐた志賀君が、あべこべに苦言を呈されてしまつた。

『濟みません。まだよく拜見してなかつたもんですから、いや、その中調べて置きます』

『まるで答案みたいなことを仰有るんですのね』

『それぢや、恐縮ですが、ちよつと緣側へ出て下さいませんか、その、寫眞を探しますから』

と夫人を部屋の外へ追ひ出して、志賀君は押入の中へ頭を突込んだ。襦衣や猿股と同居して、あるわ〳〵、花嫁候補の寫眞がウンと溜つてゐる。何しろ志賀君は、中學には勿體ない程の敎師

だし、グレーテングといふ素晴らしい餘技があるし、その上品行方正と來てゐるから、先輩、親戚、父兄と云つた各方面から、緣談が降る樣にあるのだ。

さて彼氏、やつとそれと覺しき寫眞三葉を發見して、パンパンと威勢よく埃を叩いてから、緣側へ聲をかけた。

『どうぞお入り下さい』

『和歌が一首出來ましたわ』

夫人はニヤ〳〵しながら入つて『柔肌に化粧こらせし乙女子の、埃にまみれ、哀し寫繪——。悲しき母性愛の歌でざアますわ』

『埃にまみれ——？　ア、覗いてましたね、押入から出す所を』

『まア、押入へ入れてらしたんですの？　可哀相に、罪もないのに押入などに入れられて——』

夫人は母性愛の顏を歪めた。

『一體、どれがいゝでせう？　一寸見てやつて下さい』

志賀君は、他人事の樣に、寫眞を夫人の前に差し出した。

『あ、これはあたしが持つて來た寫眞ぢやございません』

寫眞を手に取つて見て、夫人はムツとした。

『しまつたツ』

志賀君は夫人の手から寫眞を引奪つた。

『先生はまア、見合ひをやると云へばすつぽかしなさるし、寫眞を上げれば紛失なさるし、何うしてさう結婚がお厭なんでせう』

『しかし奥さん、北澤なんか、僕より年が上だけど、獨身でせう』

『あの方は變り者ですから、特別です。工場を提供しますから技師になつて下さいと云つても厭だと仰有るし、あたくし、先生を北澤さんみたいにしたかございません。それに、あの方には國元にチヤンとした奥さんがあります。最近上京なさるさうですよ』

『さうですか。愈々獨身が僕一人になつて、愉快だな』

志賀君は笑つた。

夫人は絶望の溜息を吐いたが、急に調子を更へて、

『あのネ先生、あたくし、これから息子の主任の先生のお宅へ伺ひたいんですけど、恐れ入りますけど、先生御一緒にお連れ下さいません』

『五年B組の主任は岸田君ですね。承知しました。御案内しませう』

これで緣談から解放されたと思つて、志賀君、ホツとして起ち上つた。

省線S驛の前で、二人は車を降りた。

『あの、あたくし、ちよつと買物がしたいんですけど——』

『あ、さうですか』

二人は、省線前のデパートの支店へ入つた。

『先生。彼處のね、化粧品の賣場の前にポツネンと立つてるお嬢さん、あれ何うお思ひになりますの？』

夫人はソツと志賀君に囁いた。

『さてはツ』

志賀君は甘々と、騙されて見合ひに連れて來られたのだ。

と思ひながらも、ついお嬢さんの方を見ようとした時である。その視線の中間に兀然と現れてビヨコリとお辭儀をした少年がある。見ると三年の生徒だ。志賀君は眞赤になつて逃げ出した。

『先生、如何でございましたの？　いゝお嬢さんでせう』

夫人は得意さうに訊いた。

『いや、なるほど』

志賀君は敵を見届けない中に逃げ出したのだから、出來るだけ曖昧な言葉を使用して誤魔化し